

1 埼玉 2 埼玉 3 埼玉 4 埼玉 5 埼玉 6 埼玉 7 埼玉 8 埼玉 9 埼玉 10 埼玉 11 埼玉 12 埼玉 13 埼玉 14 埼玉 15 埼玉 16 埼玉 17 埼玉 18 埼玉 19 埼玉 20 埼玉 21 埼玉 22 埼玉 23 埼玉 24 埼玉 25 埼玉 26 埼玉

谷の成谷 荒研 大矢 谷中ヶ 一里塚 川大 大手

| 凡例 | 地形区分 | 時代区分 |
|---|---|---|
| <p> ① 古墳時代 ② 平安時代 ③ 室町時代 ④ 徳川時代 ⑤ 明治時代 ⑥ 大正時代 ⑦ 昭和時代 ⑧ 戦後時代 </p> | <p> ① 河川沿線 ② 自然堤防 ③ 下位段丘 ④ 中位段丘 ⑤ 上位段丘 </p> | <p> ① 縄文時代 ② 弥生時代 ③ 古墳時代 ④ 平安時代 ⑤ 室町時代 ⑥ 徳川時代 ⑦ 明治時代 ⑧ 大正時代 ⑨ 昭和時代 ⑩ 戦後時代 </p> |

II. 層序と土質

第4図

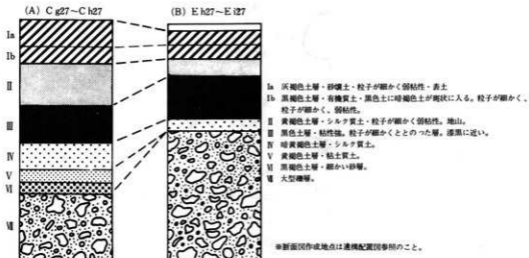
表土から基盤となる大型礫層に至るまで6層に分けられる。I層は耕作土たる表土であるがEhライン上では、保育園のグラウンドであったため5cm前後の盛土がのる。I層は上層と下層とに細分され、後者は耕作土から下層への漸移層として位置づけられ、遺物の主たる包含層でもある。

遺構検出面は第II層の黄褐色シルト質土上面にあたる。この面は東西方向に於いては平坦であるが、南北方向に於いては起伏を持ち、厚さも異なる。Eh1ブロックでは約15cmの層に堆積しているが、Cghブロック付近では約35cmの厚さになる。これらの2地点では基盤礫層上面に於いては50cm近くの比高差があり、当然のことながら一段下がる面に近い北側の方が低位にある。また、II層は、畑地として使用された地目にあつては、上面からの耕作・攪乱等が及び、面的には必ずしも平坦ではない。

III層は、粒子が細かく粘性の強い黒色土層であるが、より黒色が強く漆黒色といった方が適切である。この部分はII層が薄い所や遺構掘り込みの深さ等によって底面に露呈している。また、III層下部は下層への漸移層として細分可能な部分もあるが特に分けない。本遺跡内の遺構底面の多くは、III層直上にあるか、あるいは同層に入り込んでいる。従つてII層と混じつて底面を汚している例が多い。

IV層は、厚さが10~30cm位であり、北側程厚くなっている。

V・IV層は、Cghブロックでは各々10cm前後の層を形成しているが、Ehブロックでは消滅している。礫層そのものも起伏を持つことから凹み部分に堆積するか、または低位の部分に於いて形成される類の土層であろう。



第4図 石田遺跡標準土層断面図

III. 検出された遺構と遺物

本遺跡内からは、縄文時代と思われる竪穴状遺構1、歴史時代の竪穴住居跡乃至竪穴状遺構が49棟、掘立柱建物遺構6棟、規模の大きい東西溝3、同南北溝5本、他小溝や溝状遺構が10数本、諸ピット等が確認された。このうち竪穴住居の点敷内には旧期の遺構内におさまるものが2棟含まれる。また掘立柱建物遺構には規模を若干縮小した形での建替えがあると思われるものが1棟含まれ、実質7棟分になる。

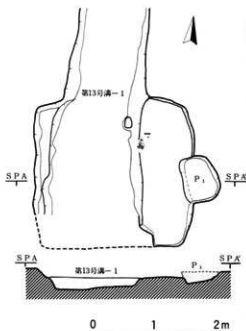
出土遺物はかなり複合したあり方をみせ、縄文式晚期土器、弥生式土器、石器、江別式土器、土師器、須恵器、砥石、鉄製品等があり、一部地域には近世の陶磁器類もみられた。

以下については、1-竪穴住居跡、2-竪穴状遺構、3-掘立柱建物遺構、4-ピット、5-溝・溝状遺構、6-その他、の順に検出された遺構と遺物についての記述をする。

なお、文中では、出土遺物中の実測された土器類についての計測値、技法等については省いているため、後掲の環・甕型土器一覧表を参照されたい。

1. 竪穴住居跡

Bb24竪穴住居跡 第5図



第5図 B b24竪穴住居跡

第13号溝によって中央部が切断されている。調査時に於て溝が新規の遺構として確認されているが、住居跡内の堆積土については不明である。

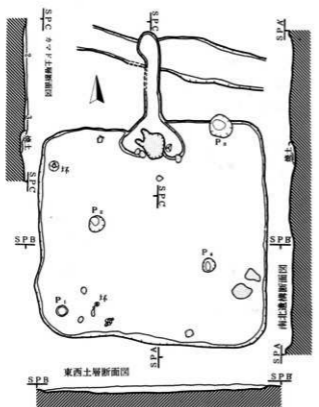
平面形・規模・方位・南辺の曲りが具合からみて点線内の規模が推定される。各隅が丸味を帯びるが、方形に近い平面を呈す。各々推定ではあるが東西辺長2.4m、南北辺長2.3m位である。南・北壁を通す中軸線は磁北線上に近く、やや東寄りになっている。

その他・壁高は概して西側が高くなっている。全体の平均で約8cm前後である。壁の残りが悪く立ち上がりは緩やかである。

また、東壁中央部は新規ピット(P₁)によって破壊されている。P₁は上幅75×60cm、下幅68×45cm程の規模であるが、深さは不明である。性格等についても明らかでない。

Bb30竪穴住居跡 第6図 第1表 写真図版6

平面形・規模・方位・平面は方形に近い。煙道は東西にはしる小溝上にあり、また北壁の一



1. 黒褐色土。軟質で粘性強。粒子が緻密で混合物なし。床面近くでシルト質土及び黒色土が斑状に入る。
2. 黒褐色土。シルトが混じる。
3. 黒褐色土。微量の焼土及びシルト混入。粘性強。

第6-1図 B b30竪穴住居跡

にして床面上にある。

柱穴・P₁～P₄までのピットがある。P₃は北壁上にある新規のもので当遺構との関わりは薄い。他については、配置の規則性が特に認められず、柱穴と断言できない。

第1表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P ₁ | P ₂ | P ₃ | P ₄ |
|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 上幅径・下幅径 (cm) | 18×18・13×13 | 25×23・14×11 | 37×35・20×15 | 22×20・14×7 |
| 検出面からの深さ (cm) | 10 | 10 | 19 | 31 |

カマド・北壁中央に位置する。燃焼部は床面より深く掘り込まれ、4～6cmの焼土層が堆積する。側壁部分は床面より若干高く残存する程度であり、明黄褐色シルトによって構築されている。両側壁の先端付近には各々2個ずつの礫がみられる。煙道は壁外に1.4m延びており、煙出し部分に於けるピット状の掘り込みはない。底面は焼土の奥まった所で一段高くなり、先端に向かって緩やかに下降する。上幅24cm・最深部で8cm程の深さとなる。

部にピットがのる。東西辺長3.5m、南北辺長3.3mの規模である。カマド方向の軸線はN-7°-Wと僅かに西寄りとなる。

堆積土・単一層である。床面近くでシルト質土、黒色土が比較的大型の斑状として入るが明確な層位を形成する程ではない。

壁・削平のため壁の残りは悪く、平均して5cm程の高さである。立ち上がりは全体的に緩いが、特に南壁が著しい。

床面・焼土の存在する周辺が若干低くなっているが、他の部分はあまり高低差を持たない。

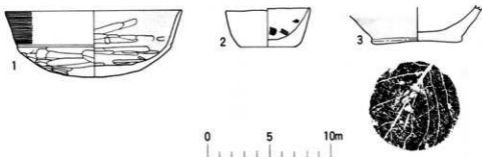
焼土の厚さは2～4cm程度で、暗褐色のシルトと混じっている。南西隅の焼土にあつては土器細片も含まれる。尚、A・Bは土器であるが、何れも口縁部を下

出土遺物

坏型土器・一覧表記載のNo. 1。

甕型土器・No. 3。底径7.3cm大の底部片である。残存する体部の立ち上がりの様子からみると球胴を呈する器形なのであろう。また、体部内面は匏ナデ、外面には朱塗りの痕跡がある。

その他・No. 2の手捏ね小型土器がある。底部には木葉痕を残している。内面は匏ナデ調整。

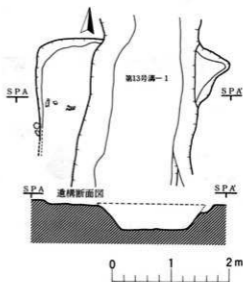


第6-2図 B b30竪穴住居跡出土遺物

Bc24竪穴住居跡 第7図 写真図版7

全容についての詳細が明らかでないため一括して記すこととする。

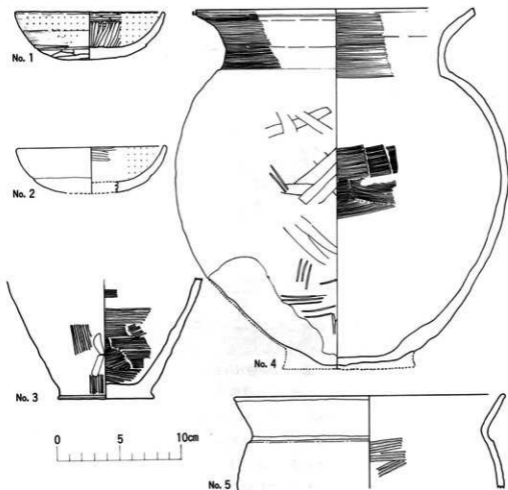
第13号溝により住居跡の大半が壊される。また、南側の焼土の存在する周辺に於ける壁は削平のためか確認されない。焼土より南側部分の床面についても同様である。第13号溝の東側の一部にみられる張り出し部分は、当住居跡の北壁の延長にもとれるが、底面のレベルが10cm以上も低いことや形状からみて、別個の遺構の残痕と思われる。北壁と西壁の残存辺長は各々1.0m、1.5mで、壁高は残りのいい北壁で約9cm、西壁で7cm程である。後者の壁高は南側に行く



第7-1図 Bc24竪穴住居跡

に従って低くなり、焼土の手前では消えてしまう。焼土は、一部第13号溝下になっており、60×45cm径位に広がるが、厚さや土質については不明である。また、カマド燃焼部の残痕の可能性もあるが、性格は不明である。遺物は床面と西壁上にみられ、何れも土師器である。尚、壁上にある円形の土器は内黒を呈す坏の底部である。

出土遺物



第7-2図 Bc24竪穴住居跡

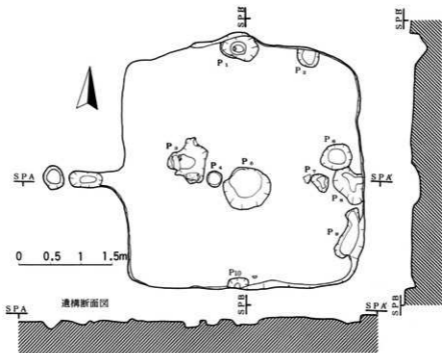
坏型土器・D類だけの出土である。No.1・2の2点は、体部の下位に段を有するが内面のくびれはない。No.1の段は沈線に近いものであり、No.2は磨滅しているため段はあまり目立たない。

甕型土器・土師器だけの出土である。No.4は球胴形のもので、肩部段も明瞭である。No.5は長胴形の甕と推されるが、この場合も肩部の段は明瞭に形成されている。他同種の破片があるが、刷毛目で仕上げる例が多い。

Bc68竪穴住居跡 第8図 第2表 写真図版3

平面形・規模・方位・方形に近いが角張らない平面を呈す。東西辺長約3.4m、南北辺長約3.8mの規模である。カマドを中心とする軸線はN-96°-Wとなる。

堆積土・不明



第8-1図 Bc68竪穴住居跡

壁・南壁部が約12cmの高さで残るが、他の辺は遺構確認時の削平のため2～3cm程度と残りが悪く、特に西壁上のカマド北側は床面レベルと殆んど同じになっている。

床面・削平の多い西側部が東側床面のレベルより5cm程高くなっている。凹凸は東西のベルト下部に若干の掘り過ぎがあるが、その部分を除けばあまり目立たない。

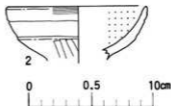
柱穴・住居跡内には変形したものをも含めて10個のビットがあるが、柱穴と断定できるものはない。このうちP₈は深さが40cm位あるもので、壁際に礫が貼りついている。P₁・P₆・P₈は上・下幅の一定しないもので、検出面からの深さが8～10cm程度である。以下、ビット計測の一覧を記すが、既述のビットについては省略する。

第2表 住居跡内ビット計測値一覧表

(単位 cm)

| | P ₁ | P ₂ | P ₄ | P ₆ | P ₈ | P ₁₀ |
|----------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|
| 上幅・下幅径 | 62×38・25×20 | 35×30・22×23 | 26×25・20×18 | 73×70・50×45 | 50×40・28×25 | 32×18・9×9 |
| 検出面からの深さ | 17 | 13 | 10 | 11 | 15 | 9 |

カマド・西壁中央部に位置する。周辺の削平が激しかったために、煙出しが独立したビットのようにになっている。燃焼部に関わる構造物については不明である。壁と煙道部の境界は断面図にある通り、凸部によって分けられている。煙道は残存部で壁から90cm延びる。上幅25cm、検出面からの深さは平均13cmの規模である。底面は燃焼部面とほぼ同じレベルにあり、西側半



第8-2図 Bc68竪穴住居跡

分はそれより5cm程凹み、西端で上がる。煙出しは、煙道先端部の西側約10cm離れた地点にある。ピット状に掘り込まれたもので、上幅32cm、深さ14cm程度である。

出土遺物

坏型土器・No.1は、典型的なB類である。色調は赤褐色を呈し、体部の凹凸が比較的目立つ。歪みも大きい。この他に糸切痕を有す同類の底部片が1点ある。No.2は、台付坏と思われる。体部上方に沈線線を有し、更にその下方に段がみられる部分もある。横ナデと削りの境界は後者の部位にあたる。

その他D類と思われる破片が埋土内より4点、床面より1点、C類口縁~体部片が床面より1点出土している。D類の外面の仕上げは削りのものが目立つが、1点だけみがきを施すものがある。

変型土器・破片だけの出土。ロクロ成形と思われるものと、外面に刷毛目か削り、内面に寛ナデ痕を有する破片とがある。

Bd36竪穴住居跡 第9図 写真図版7

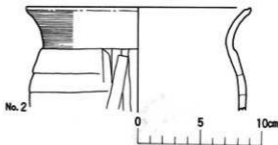
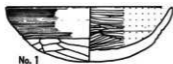
西壁側は調査範囲外、東壁側は性格不明の溝で切られており、北・南壁の一部を残しているだけである。南北方向の壁間は4.4m。南壁・北壁の残存辺長と壁高は各々3m・7cm、3m・4cmとなっている。プランについては判然としない部分があるため特に図示しない。

カマドは残存する北壁の中央部にみられ、燃焼部側壁をシルト質土で構築している。燃焼部径は約80cm位であるが、煙道・煙出し等については確認されなかった。

出土遺物

坏型土器・沈線に近い段を有すD類の坏である。横ナデと削りの境界は沈線部分と緩やかな段状部分とがあり、それに対応する位置にくびれがみられる。

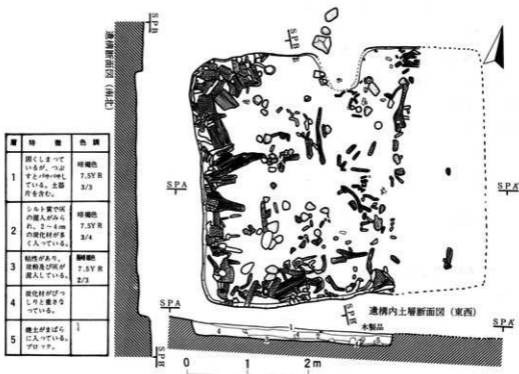
変型土器・No.2は、重複する溝上からの出土で、反転復元による実測である。縦方向の削りで調整した肩部付近は、横位の寛ナデによって区切られ、軽い段を形成している。外面は肌色



第9図 Bd36竪穴住居跡出土遺物

に近く、内面は灰白に近い色調を呈す。

Bd71竪穴住居跡（焼失家屋）第10図 写真図版3



第10-1図 Bd71竪穴住居跡

当遺構は保存の対象となり、然るべき措置を施した後に埋め戻されたものである。従ってカマド・柱穴・その他の施設、炭化材下の遺物等についての詳細は不明である。

平面形・規模・方位・東側は道路・側溝によって破壊されているが、道路敷下に一部東壁の残骸があり、ある程度のプランは推測できる。図中の点線部がそれに相当する。南北辺長約3.7 m、東西辺長推定4.7 mと東西に長い方形を呈す。残存壁長は南壁で3.5 m、北壁はカマド部

分をも含めて3.1mである。カマドを中心とする軸線はN-17°-Wとやや西に偏る。

堆積土・2～5層は炭化材・焼土・灰等の混じり方による相違であって、本来的な土質のそれに関わるものではない。従って、ここでは1層と炭化材を中心とする下位層の二種類に大別される。南北辺の土層断面図には、壁際に4層と地山の混じる崩土がみられるが、西壁側にはみられない。

壁・西・南壁は平均24cm前後、北壁は15cm前後の壁高である。立ち上がりは直角に近い。

その他・炭化材は壁に沿うものと、中央に向って倒れているものがある。また、板状、角状ないしは丸太状を呈すものがあり、前者が下部にある例が多い。これは、壁材または床材として使用した板材に上部構造に関わる材が崩落した結果であろう。

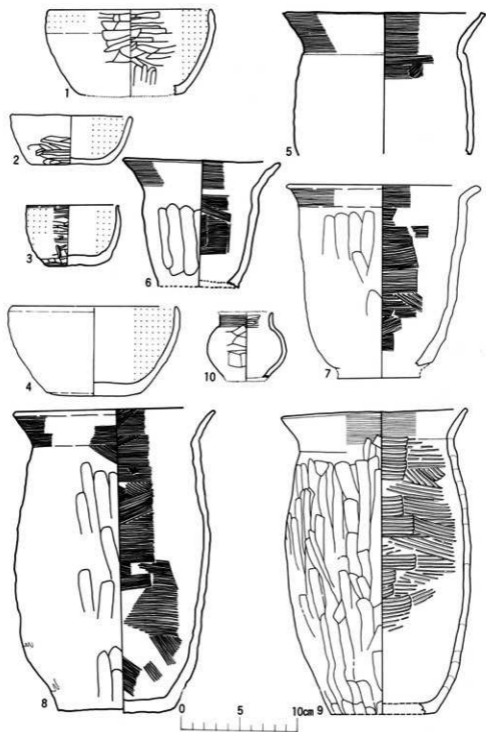
周溝は、あるとすれば壁際の炭化材下に考えられるが、不明である。北・西壁の一部に密着した形で残る炭化材は本来的には壁材として使用されたものと思われ、それを支える役割を持つ溝の存在は考えられる。また、南壁周辺には円形の孔を有す炭化材があるが、木製品なのか家屋材の一部であるのかは不明である。尚、住居跡内には礫が多く入り込んでいるが、炭化材の上ののっている例が多い。比較的大きいものもあり、人為的に投げ込まれたと推される。

出土遺物

環4点、甕5点、この他に小型の壺型土器1点の実測である。

環型土器・環は、No.1・2・3・4等であり、何れも無段・平底を呈している。口縁は直口一内湾のもので占められ、体部の立ち上がりも急である。No.1は底部を欠失している。内面と外面の口縁部に比較的単位の大きい寛みがき痕が観察される。黒色処理の範囲も同様であり、外面の体部は寛削りによって仕上げられている。No.2は、外面の体部から底部にまで明瞭な寛みがき痕を有しているが、内面はバインダー付着のため不明である。体部と底部の境界が明瞭な平底を呈している。No.3は、内面のみならず外面のま程の範囲にも黒変ないしは黒色処理の痕跡がみられる。寛みがきの単位は、外面では体部・底部の全面に観察されるが、内面はバインダーが付着しているため不明である。No.4も外面の底部を除く部分にバインダーが付着しており、成形技法は不明な部分が多い。技法が判明する底部は、一部が寛みがき様を呈するが、不定方向の寛削りが主である。尚、本遺構に於ける遺物のあり方は、ロクロを使用しない環型土器の中で、技法・形態等で他とは異なるものである。

壺型土器・No.5・6・7・8・9の5点で、何れも酸化焙焼成による。No.5は、反転復元による実測、体部外面にバインダーが付着しており、この部分の成形は不明である。肩部の段は比較的明瞭に残っており、器形的には長胴を呈すと思われる。No.6は小型のもので、口縁と体部の境界が不明瞭である。底部は欠失しており、口縁に重みがある稚拙な作りである。No.7は器形的にはNo.6に類似しており、口縁の作りが稚拙である。底部が剝離しており、全体的に色



第10-2圖 B d71竪穴住居跡出土遺物

調が明るい。No.8は、大きさや形が殆んどNo.9の甕に類似しており、技法的にも大差ないが、外面の磨減が激しい。No.9は底部の大半を欠失しているが、全体としては残りがいい。段はあまりはっきりしないが、頸部に沿って横位の刷毛目または沈線状痕が観察され、その上を更に寛削りで仕上げている。本来的には肩部に何らかの境界を意図したものと思われるが、その大半は寛削りによって目立たなくなっている。胴部に若干の垂みがあり、巻上げによる凹凸もみられる。

No.10は、土師質の小型の土器である。壺型を呈す手捏ね土器で、外面を寛削りし、内面は寛みがきで仕上げている。

この他に甕の破片が出土しているが、二次焼成のためか黒変しているものが多い。外面を寛削り、内面に刷毛目を施す例が大半である。

Bd80竪穴住居跡 第11図 第3表 写真図版3

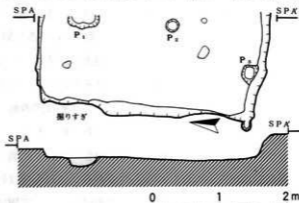
平面形・規模・東側は調査区域外のため未掘であるが、方形の平面を呈すると思われる。西壁は3.5m、北壁・南壁の残存辺長は各々1.8m、1.3mとなっている。

堆積土・不明

壁・南側の検出面が掘り過ぎのため壁高が10~13cm位しか残っていない。それ以外の所では平均して30cm前後の壁高を有している。壁の立ち上がりは外傾するが、北壁の一部は上部が崩壊して外反する断面を呈す。

床面・平坦である。高低差は北壁側が南壁側に比して5cm前後低くなっているが傾斜を持つ程ではない。床面上には土器・礫が若干あるが、焼土の広がり等については確認されていない。

柱穴・ピットは、半掘されたP₁を含めて3個検出された。床面からの深さが何れも同じ位であるが、配置に規則性があるわけでもなく柱穴と断定できるものはない。



第11-1図 Bd80竪穴住居跡

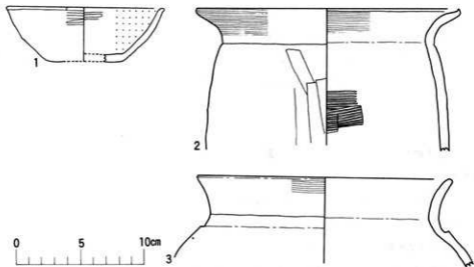
第3表 住居跡ピット計測値一覧表

(※検出面からの深さ)

| | P ₁ (半掘) | P ₂ | P ₃ |
|-------------------|---------------------|----------------|----------------|
| 上幅径・下幅径・深さ * (cm) | -×47・-×35・10.1 | 20×19・16×14・10 | 27×20・18×15・11 |

出土遺物

環型土器・図示したのはNo.1だけであるが、D類の破片が多くみられる。他にA類の口縁・体部細片が2点出土している。



第11-2図 Bd80竪穴住居跡出土遺物

壺型土器・土師器の出土が多い。No.2は長胴の壺と推され、No.3は肩部の張り具合からみて球胴を呈するものであろう。

Be50竪穴住居跡 第12図 第4表 写真図版5

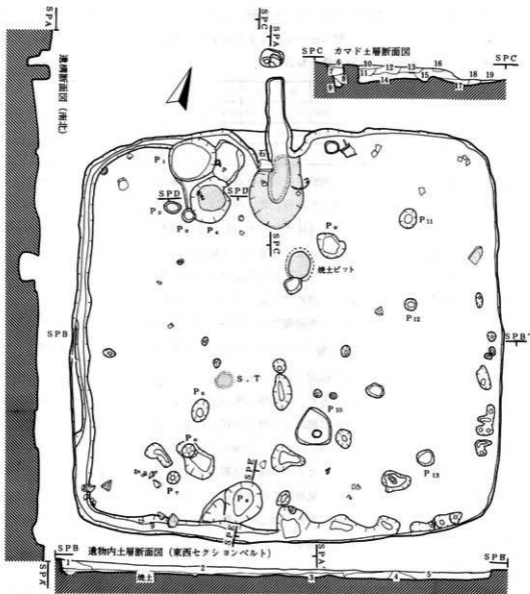
平面形・規模・方位・東西辺長6.3m、南北辺長5.7mの規模。形状は隅丸型の方形に近い。カマドの方向を中心とする軸線はN-24°-Wと西に偏る。

堆積土・3層は東側部分を除く床面上に堆積しているが、生活面に相当すると考えられる。図示した土層断面図は周溝を掘り上げる前の段階のものであるが、本来的には点線の通りの周溝が入る。周溝の埋土は不明であるが、3層は図の如く壁まで達していることから、少なくとも3層の形成時では埋められてしまったと解される。一方、4・5層は粘性に富む土質である。5層は堅くて、黒色土と褐色シルトが各々ブロック的に混入していることから、東側部分は人為的に埋め込み、叩きしめたものであろう。尚4層はP₁₁・P₁₂の延長上にみられる土で3層と5層の境界にあたる。このラインは南壁下にあつて周溝の途切れる位置にも重なる。

壁・西壁の一部が軽い段を有すが、他は直角に近い立ち上がりを呈す。壁高は床面より平均20cm前後である。

床面・ピット・周溝部分を除けば、凹凸は少ない。レベルで見れば、東側が低くなっており、西側に比して4～9cmの比高差を持つ。また、全体としては南壁下周溝より内側付近が若干高くなっている。尚、焼土は床面上では住居内中央周辺の南西寄りにみられる。

柱穴・多数のピットがあるが、位置的にみて柱穴らしき配列を示す例も散見される。一応、P₁₁を中心とし、配置の規則性・底面のレベルや深さを考慮すれば、P₁₃・P₁₄・P₁₅等が考えられる



| 層 号 | 特 徴 | 層 号 | 特 徴 |
|-----|--|-----|---|
| 1 | 植栽土 コンクリートがアロップ状で混入。中から腐植土層が一部観察あり。 | 10 | 暗褐色 コンクリートのアロップ、褐色土の中粒、焼土が混入、やや中から腐植土層が観察される。 |
| 2 | 暗褐色 2層がやや暗く、腐植土層混入。1層を覆う。中から中粒観察あり。 | 11 | 暗褐色 コンクリートのアロップが混入。焼土と腐植土が混入。12層より中から中粒が観察される。 |
| 3 | 灰色 コンクリートがアロップ状で混入。中から中粒観察あり。 | 12 | 暗褐色 2層より中から中粒が観察される。焼土と腐植土が混入。 |
| 4 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 13 | 暗褐色 2層より中から中粒が観察される。焼土と腐植土が混入。 |
| 5 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 14 | 暗褐色 焼土の層が少なくなる。中から中粒観察あり。 |
| 6 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 15 | 暗褐色 焼土の層が少なくなる。中から中粒観察あり。 |
| 7 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 16 | 暗褐色 焼土の層が少なくなる。中から中粒観察あり。 |
| 8 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 17 | 暗褐色 焼土の層が少なくなる。中から中粒観察あり。 |
| 9 | 暗褐色 2層より暗く、中から中粒観察あり。 | 18 | 暗褐色 焼土の層が少なくなる。中から中粒観察あり。 |

SPD SPD



SPE SPE'



0 1 2 m

第12-1図 Be50型穴住居跡

が、浅いものが目立つ。他の焼土ピットや不定形・小型のピット等があるが性格が明確にされない例が多い。以下については壁に近い小ピットや不定形の浅いピットを除いて一覧表に記す。

第4表 住居跡内ピット計測値一覧表

(※検出面からの深さ、単位cm)

| | R ₁ | R ₂ | R ₃ | R ₄ | R ₅ | R ₆ | R ₇ | R ₈ | R ₉ | P ₁₀ | P ₁₁ | P ₁₂ | P ₁₃ |
|-------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 上 編 径 | 77×66 | 27×18 | 23×21 | 70×65 | 38×27 | 23×20 | 20×20 | 70×63 | 50×35 | 62×59 | 32×28 | 20×20 | 28×25 |
| 下 編 径 | 60×57 | 20×14 | 14×4 | 47×40 | 14×11 | 8×9 | 7×7 | 45×30 | 30×25 | 15×13 | 15×12 | 12×9 | 22×16 |
| ※深 さ | 23 | 10 | 17 | 32 | 24 | 10 | 7 | 24 | 12 | 10 | 10 | 10 | 6 |

周溝・西壁を中心とし、北壁・南壁の一部に及んでいる。南壁下の周溝はかなり変形しており、ピット状に落ち込んでいる部分もある。北・西壁は大体形が一定しているが、壁に段をもつ状態になっている所もある。深さは床面より平均して6cm前後である。東壁から北壁の一部にかけては、特に掘り込まれた形跡はない。また、土層断面図を記した西壁下地点の周溝上部には3層が堆積しているが、縦横の広がりをごこまであるかは掴めない。しかし、少なくともこの部分は周溝を掘り込んだあとに埋め戻しをしていたことは推察される。

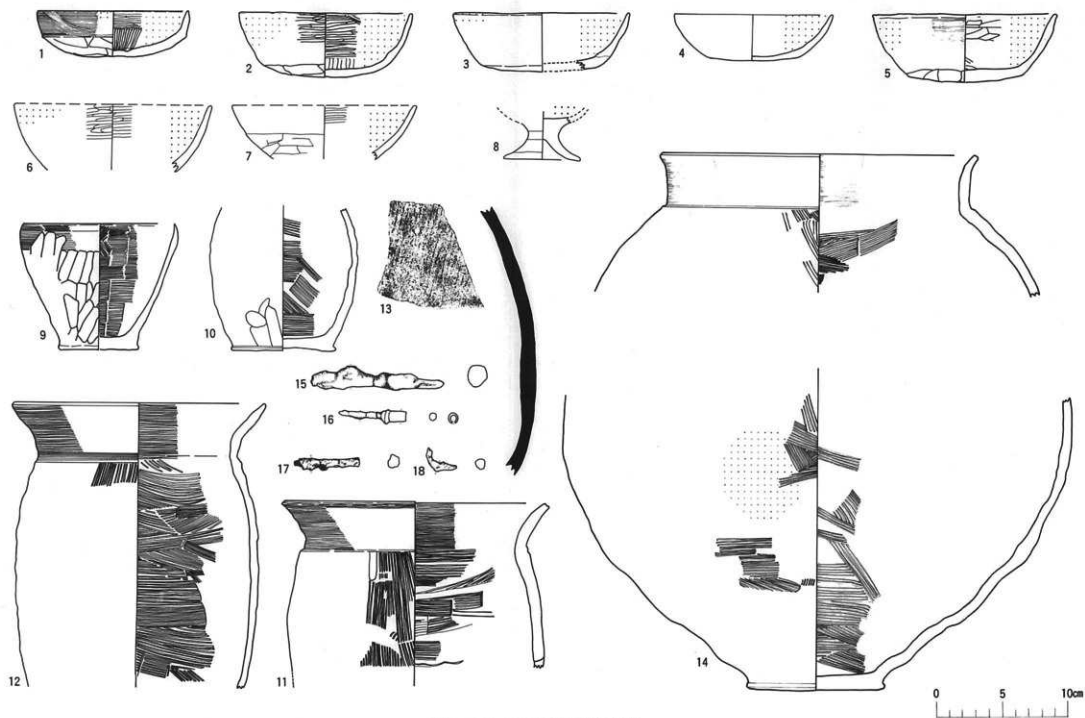
カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部は1.2×0.9m径の楕円形に広がり、最深部は床面より14cm下に達する。上層には炭化層が薄くのり、その下には焼土がつまっている。燃焼部側壁は遺構検出面とほぼ同じレベルで確認されている。地山とほぼ同じ土質を呈しているので、一見削り出しによるものとも思われるが、左側壁の礫のあり方からみて、シルトによる構築の結果とみるのが妥当であろう。煙道は燃焼部の焼土が切れた所から壁の突き出した部分までと思われ、約1.2mの長さである。一旦、窟んでから徐々に下降する底面を呈しており、その先端は検出面より27cm程の深さとなる。その先15cmの位置には37×27cm径、検出面よりの深さが37cmの規模を呈するピットがある。一見煙出しの様相にもとれるが、カマド部分の土層断面図でみる限りは、独立したあり方をしており、煙道との繋がりが不自然である。トンネル状に繋がるものかもしれないが、その確証を得ていない。

出土遺物

環型土器・図示したのはD類のみである。他は破片で、覆土中にA類が若干みられる程度。D類は体部に横ナデまたは疵みがき、下底部には疵削りを施すのが目立つ。僅かな段の痕跡を残しているのはNo.1だけである。また、一部に沈線留めるが殆んど目立たないNo.7がある。他は無段のもので、当然内面のくびれもみられない。

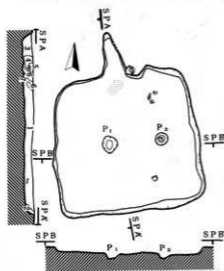
壺型土器・大小あるが、No.4の球胴を呈すものがセットとして共伴する。内外面とも刷毛目仕上げの例が多い。肩部の段は何れの場合にあっても、比較的明瞭である。

その他・No.9の鉢がある。体部上半に2条の巻上げ痕が観察される。疵削りは底面にも施されている。No.5～18は鉄製品である。



第12-2图 Be50整穴住居跡出土遺物

Bf30竪穴住居跡 第13図 第5表 写真図版8



- 1 暗褐色土、軟質、粘性強、しまり良好、シルト混入。
- 2 暗褐色シルト。暗色土+褐色土。
- 3 暗褐色シルト。しまり良好、少量の焼土が下部に入る。
- 4 暗褐色土、軟質、粘性強、しまり悪い、下部に焼土若干、シルト+有機質土、やや硬なる層。
- 5 暗褐色土、6よりシルト質部分が多い。
- 6 暗褐色土、6より硬質。
- 7 暗褐色土、6より硬質。

第13図 Bf30竪穴住居跡実測図

柱穴・P₁・P₂のピットが確認された。これらを繋ぐ直線は南壁に平行する形にあり、西壁とP₁・P₂間も等距離にあることから、何らかの規則性を持つ可能性もあるが、柱穴と断定するだけの根拠に欠ける。

カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部から煙道まで床面と大差ないレベルにあり燃焼部に於ける掘り込みがみられない。焼土の広がりには20×30cm径位の楕円形にある。燃焼部の側壁や上部構造に関わる施設の痕跡は特に検出されていない。ただし、北壁カマド東側の変形した部分とその残痕でもあろうか。本遺跡内にあっては、削り出しの結果としてカマド脇にこのようなブランを有する遺構は他例がなく、また、土器Aが壁外上にあるのも不自然である。

煙出し部分にはピット状の掘り込みもなく、煙道部との明瞭な境界がみられない。先端部は壁より外側に60cm強延びている。深さは検出面より10~15cm内にある。

出土遺物は少なく、土師器の破片だけである。木葉底を呈すもの2点、他は外面に削りを有す体部片等があるが、内面の仕上げは判然としない。

Bh03竪穴住居跡 第14図 第6表 写真図版9

平面形・規模・方位・北壁のカマド東側が変形しているが方形に近い。東西辺長2.4m、南北辺長2.2mの小型住居跡である。カマドを中心とする軸線はN-20°-Wとなる。

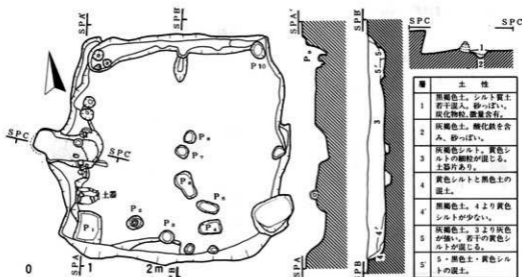
堆積土・1層と壁際の崩土で埋まる。1層には検出面・中位・下位の何れにも土器片が混入している。土器は土師器の他に縄文片も混じる。

壁・壁高は4cmから20cm前後までと場所によって異なる。全体としては、住居跡の南側が高く北側が低い。これは検出面である地山に高低差があり、また床面にも同様のことが言えるため複合的に数値が増減した結果である。

床面・基本層IIまでの掘り込みであり、III層に近い部分でもある。西壁側に若干の窪み部分が見られるが、それらを除くと床面の比高差は4cm内に留まる。

第5表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P ₁ | P ₂ |
|--------------|----------------|----------------|
| 上幅径・下幅径(cm) | 28×23・15×11 | 19×16・10×10 |
| 検出面からの深さ(cm) | 15 | 13 |



第14-1 図 Bh03 竪穴住居跡

平面形・規模・方位・西壁カマド周辺の壁が外側に張り出し、東壁がピットによる掘乱を受けており、壁そのものは直線的ではないが、全体としてのプランは方形的である。東西辺長3.4 m、南北辺長3.6 mの規模。カマド方向の軸線はN-78°-Wとかなり西に偏る。

堆積土・ピットの埋土・壁際の崩土と第3層がある。崩土は黄色シルトと黒褐色土の混土であり、下部は黒色が強くなる。黒色の強い部分は本来的には崩土とは別のものと考えられ、5'層にみられる土に近いものであろう。これらは、基本層のIII層に当たる黒色土との関わりで生じたものとみられる。

壁・地山を壁としているが、基本層IIにあたる部分と、場所によっては同III層までの掘り込みが考えられる。緩やかな立ち上りを呈す部分が多いが、東壁は直角に近い。

床面・土層断面図上には出ていないが、北壁の南側半分近くは周溝を黄褐色シルトで埋めて段状に形成した痕跡がある（写真図版9参照）。平面図はそれを取り除いた最終のものを示している。同様に南壁中央付近にもテラス状の段がみられるが、この場合は基本層IIで形成されており、削り出しによるものである。これらの部分を除くと床面は平坦で、高低差も少ない。

柱穴・住居跡内には、後世のものを除いても多数のピットがある。方形・楕円・円形等の形状を呈し、端的に言って本遺構に伴う柱穴と断言できる例はない。配置の規則性も特に強く見られるものではないが、P₂が柱あたりらしき痕跡を持つことから、柱穴の可能性を持つことは否定しない。以下についてはピットの計測値を一覧に示すが、小型のものや浅いものについては除外してある。尚、Rは方形のプランを呈し、焼土や炭化物が入っている。またP₆・P₈については2基のピットが複合しているものと思われるため、平面図上から推察して記している。

第6表 住居跡内ピット計測値一覧表

(単位 cm)
(R₂の下幅径は柱あたり部分である)

| | R ₁ | R ₂ | R ₃ | R ₄ | R ₅ | R ₆ | R _{6'} | R ₇ | R ₈ | R ₉ | R ₁₀ |
|----------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|
| 上幅径 | 47×40 | 23×21 | 22×20 | 48×24 | 35×15 | 30×25 | 20×- | 20×17 | 19×21 | 20×15 | 27×20 |
| 下幅径 | 42×30 | 10×10 | 17×17 | 32×19 | 27×14 | 23×- | 18×- | 18×15 | 14×16 | 4×4 | 17×12 |
| 検出面からの深さ | 18 | 16 | 不明 | 12 | 12 | 16 | 13 | 11 | 9 | 9 | 17 |

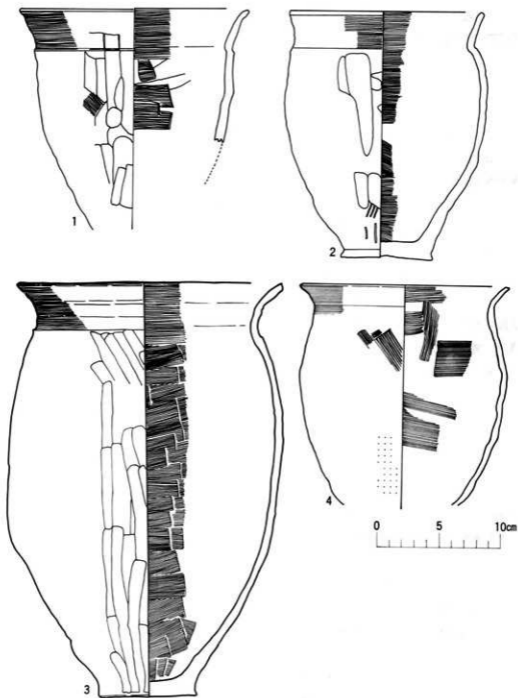
周溝・北壁にみられる。底面幅は10-23cm内、床面からの深さは平均で10cm前後である。床面の項でも記したが南側半分近くはシルトによって埋め込まれており、床面より7cm程度の高さで段を形成している。

カマド・西壁中央部に位置する。燃烧部は最深部で床面より15cm程掘り込まれているが、この部分の焼土の状態は明らかでない。確実に焼土層が存在するのは図示した範囲である。燃烧部の側壁は一見地山の削り出し風にもみえるが、側壁に使用したと思われる礫の入り方からみて、シルトによる構築と考えられる。煙道部分は壁外ですぐに立ち上がるため殆んど無く、燃烧部と煙出しが直結する形状を呈している。これらの境界には、両壁から内側に張り出している部分があったが、図示した最終平面図段階では除去している。恐らく燃烧部側壁やその上部構造に関わる施設の一部と思われ、シルト質土によって構築されていたものである。土器取り上げ前の写真図版9にまだその痕跡が残っているのが観察される。また、境界の手前には土器が底部を上にして置かれてあり、支脚として利用されたと思われる。一方、煙出し部分はピット状に掘り込まれていないが、西端側がオーバーハングする形にあり、断面は「く」の字状を呈している。検出面からの深さ約40cm、上幅は40cm程度の規模である。

出土遺物

環型土器・D類の破片が覆土中より若干出土しているだけである。これらの破片の中には、体部にナデ、底部に削りを有するものが散見される。

甕型土器・土師器のものが主体である。須恵器の体部片が1点あるが、覆土中からの出土。No.1は土師器の中型甕である。体部のみならず口縁部に至るまで巻上げの痕跡が露出する程稚拙な作りである。肩部分は明瞭に画されており、口縁部を横ナデする時に必然的に形成されるものようである。外面の篋削りは刷毛目の後に施されたもので、一部には巻上げ部分を叩いたような痕跡も残る。内面は篋ナデのようである。焼成は軟質で、胎土は粗。No.2は前述の甕より肩部分は目立たないが、横ナデと篋削りの境界に繞る。外面の仕上げは、巻上げの痕跡をほぼ消し去っているが、内面の下方にあっては篋ナデしてもなお、明瞭に残っている。No.3は大型の土師器長胴甕である。肩部に明瞭な段があり、それから上が横ナデ、下方が篋削りとなる。内面は篋ナデが右から左の方向へ施されている。底部の外周は外側に突出する作りで、一部上方に反り上がる所もみられる。胎土・焼成とも良好である。No.4は、底部を欠く土師器甕。



第14-2图 Bh03竖穴住居跡出土遺物

口縁と体部の境界に一線を画してはいない。外面の仕上げは、刷毛目後に寛削りを施したと思われるが、単位は確定しない。胎土・焼成ともあまり良くなく、作りも稚拙で歪みがある。

Bh68竪穴住居跡 第15図 写真図版10

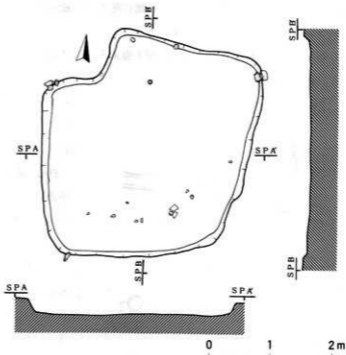
平面形・規模・方位・

北西コーナーが変形しており、内側に入り込んでいる。東西方向の辺長は3.4m、南北方向は3.3mの規模である。この辺長の南北方向中軸線はN-3°-Eと僅かに東側に振れる。

堆積土・不明である。

ここでは遺構断面図を示すに留める。

壁・床面・壁高は平均値で18cm。立ち上がりは各壁とも外傾する。床面は全面にわたってレベル差が少なく、平坦である。



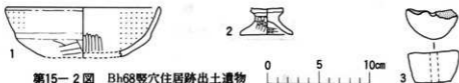
第15-1図 Bh68竪穴住居跡出土遺物

土器・礫等が散在するが、量的には床面上より上位にあるものが多い。また、床面上に於いては、焼土等の存在は確認されなかった。

施設・柱穴、周溝、カマド等の施設はみられない。北西隅にみられる地山のあり方は、重複等の事実がないとすれば意図的に掘り残したものと解されるが、具体的な用途については何とも言えない。寧ろ、北壁乃至西壁に張り出しを持つプランとして扱えられるのかもしれない。

出土遺物

環型土器・実測はD類の1点のみ。有段・丸底風の形態であるが、内面のくびれはみられない。体部はみぎきのようにも思われるが単位がはっきりしない。底部には不定方向の寛削りを

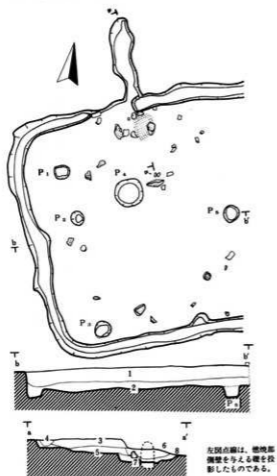


第15-2図 Bh68竪穴住居跡出土遺物

施している。大きさは推定で、口径15.2cm、底径8.0cm、器高5.0cmである。この他にD類の破片が10点程あるが、外面に削りのあるものが多い。また、No.2の高坏脚部片がある。脚径5.5cm位で、縦方向に寛削りがある。内面は黒色処理がみられる。

甕型土器・破片のみの出土である。外面に寛削りか刷毛目、内面に刷毛目を施す例が多い。口縁については、内弯気味の破片例もある。

その他・単孔式の甕と思われる破片が1点ある。No.3は、紡錘車であるが、 $\frac{1}{2}$ 程度の残り方である。直径5cm位。



- 1 7.5YR 5/6 シルト 粘性弱、硬い。
- 2 7.5YR 5/6 1層より黄褐色シルトが多い。
- 3 2・4層の泥土質の土 黄褐色シルトブロックあり。
- 4 褐色シルト質土 しまりがある。
- 5 暗褐色シルト 焼土まじり。
- 6 焼土層 5層も入る。
- 7 黒色土 炭滓部である。
- 8 地山シルトに若干黒色土がまじる。

左図点線は、地物部調査をたえる礎を投影したものである。

第16-1図 Bh77竪穴住居跡

以上であるが、甕と思われる破片を除きすべて床面出土である。尚、本遺構では須恵器は1点もみられない。

Bh77竪穴住居跡 第16図 第7表

平面形・規模・方位・東壁部が調査区域外のため不明であるが、北壁の東端部は区域外にあまり延びないと思われ、本来の平面図も方形に近いものと推察される。西壁辺長約3.8m、北壁残存辺長約3.8mの規模。カマド方向を中心とする軸線はN-10°-Wとやや西側に傾く。

堆積土・大別二層となる。色調はほぼ同じであるが、下層では黄褐色シルトの混入が上層より目立ち、上層では腐植質土の混入がみられる程度の特徴である。

壁・残存壁部の立ち上がりはほぼ垂直に近く、壁高は床面より検出面まで37cmと高い。

床面・西側部が東側部に比して4~5cm低くなるがあまり目立たず、どちらかという平坦である。

柱穴・P₁~P₆までのピットが確認された。何れも底面のレベルは殆んど同じ高さにある。各々のピットの土層断面図がないため柱あたりの有無については不明であるが、

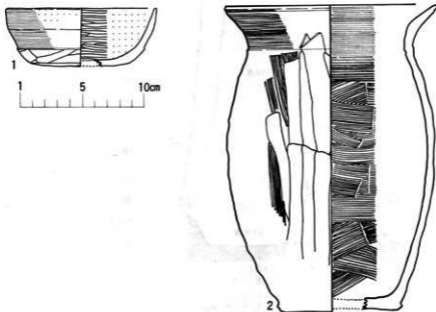
位置的にみてP₁・P₃が柱穴として考えられる。尚、P₃の底面は、住居跡中央部を背にして斜めにもぐる。

第7表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P ₁ | P ₂ | P ₃ | P ₄ | P ₅ |
|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 上幅径・下幅径 (cm) | 25×22・20×15 | 24×22・11×11 | 28×26・26×15 | 45×45・34×33 | 28×25・20×17 |
| 検出面からの深さ (cm) | 16 | 16 | 20 | 18 | 21 |

周溝・カマドの燃焼部付近を除いて各辺の壁下にみられる。底部面で7～20cm内の幅を有し平均の深さが約13cm程である。底部面のレベルについてみれば、西壁側周溝では北側が低く南側と最高で9cm弱の比高差を持ち、また南壁側周溝にあっては東側に向かって3cm程低くなっている。尚、周溝内には特にピット等の掘り込みは確認されていないが、西壁と南壁側に沿う周溝の一部が内側に変形している。

カマド・北壁に位置している。北壁の正確な辺長は不明であるが、ほぼ中央付近にあたると思われる。燃焼部側壁に於ける構築の跡は、平面図と写真(写真図版11P)図にみられるように両翼に残る礎からしか窺うことができない。燃焼部の一部は周溝上にあるが、周溝部分は黒色土で埋められており、その上に焼土やそれを含む暗褐色土が堆積している。煙道から煙出し先端部までは1.4m程の長さである。煙道は壁外へ向って緩やかに立ち上がり、0.8mの地点で更に一段高くなって煙出し部に至る。煙出し部分ではピット状の掘り込みは特にみられず、



第16-2図 Bh77竪穴住居跡出土遺物

検出面より15cm程度の深さである。

出土遺物

環型土器・D類だけの出土である。No.1 以外にもD類の破片がみられるが、体部には段を有し、しかもその位置が下位にあるものが多い。

壘型土器・肩部段が比較的明瞭なNo.2 がある。この他に破片が多数あるが何れもロクロは使用されていない。底部片としては木葉底のものもある。尚、須恵器は一片もみられない。

Bi 27 竪穴住居跡 第17図 写真図版 9

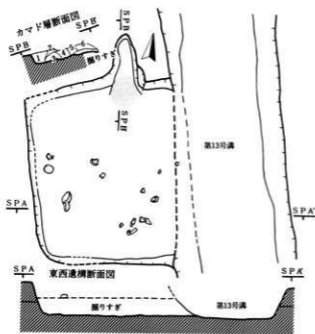
平面形・規模・方位・東側が第13号溝により、また北西隅と南壁の点線部分は攪乱によって破壊されている。推定ではあるがほぼ方形のプランを呈すと思われる。南北辺長は2.7m、北壁と南壁の残存辺長は各々2.4m程である。カマド方向を通す軸線はN-9°-Wと僅かに西側に寄る。

堆積土・不明であるが、第13号溝との新旧関係は調査時点で確認されており、第13号溝が新しい遺構である。尚、当遺構は床面の掘り過ぎのため、最終的には第13号溝の底面と同じレベルに達している。これは本来の床面が基本層序Ⅲの黒色土直上であり、その土がⅡ層との混土

によって汚れた床面となっていたため、住居内堆積土と誤認して掘り過ぎたものである。

壁・床面が掘り過ぎのため、それに伴って西壁の一部も壊されているが、床面のラインがある程度推察されるので、残存壁高の数値は出せる。これによると、平均で21cmの高さになる。

床面・揭示した平面図は本来の床面上のものである。この床面が土層断面図の点線部分に相当する。住居跡の遺物・礫の多くは点線ライン上にあり、燃烧部の底面も同位にあるほか、写真図版では基本層序Ⅱ層に掘り込まれた床面の痕跡が壁際に段状の形で残っているのが観察される。ただし、この平



- 1 暗褐色土。軟質、粘性強。小ブロックにシルト質土混入。
- 2 黒褐色土。やや硬質。緻密。若干シルト質土混入。壘った層。
- 3 シルト質土に若干の暗褐色土混入。
- 4 暗褐色有機質土。軟質、粘性強。黒ボク様土が大きな塊状で混入。
- 5 シルト質土・黒ボク・暗褐色有機質土の混土。粘土化。粘土性。軟質。
- 6 灰褐色土。若干の礫化鉄含有。塵砂が粘土化した様を呈。

第17図 Bi27 竪穴住居跡



面図からは、床面の凹凸や傾斜等についての具体的な様子は読み取れない。

カマド・北壁にある。燃焼部の焼土範囲は、カマド断面図から起したものでやや正鶴さに欠けるが、およそ50×45cm位の広がりを持つ。焼土の厚さは最高で5cmに達しており、煙道よりの焼土上からは小動物の骨片が出土している。燃焼部の側壁等に関わる施設は特に確認されていない。煙道は壁外に70cm程延びており、先端に行くに従って浅くなる。煙出し口のピットは特に掘り込まれていない。

出土遺物

出土遺物は、床面から採取された破片が殆んどである。坏型土器は、内黒で篋みがきを施したD類の体部片が若干と、同じくD類の内黒・外面篋削りの底部片が1点出ているだけである。また、甕型土器は、土師器の体部片及び体～底部片が2点出土している。前者は、内外面とも刷毛目を施し、外面には更に篋削りを加えている。後者の体部片もやはり内外面に刷毛目痕を残すが、底部が強く外反しているのが特徴的である。

Bi 53 竪穴住居跡 第18図 第8表 写真図版10

平面形・規模・方位・大小のピットによって壊されており、壁の不明な部分もあるが、本来的に方形に近い平面と思われる。東西辺長7.1m、南北辺長6.9m程の規模である。軸線はカマド方向と、南北壁の推定中点から割り出すとN-(47°±α)-Wとなる。

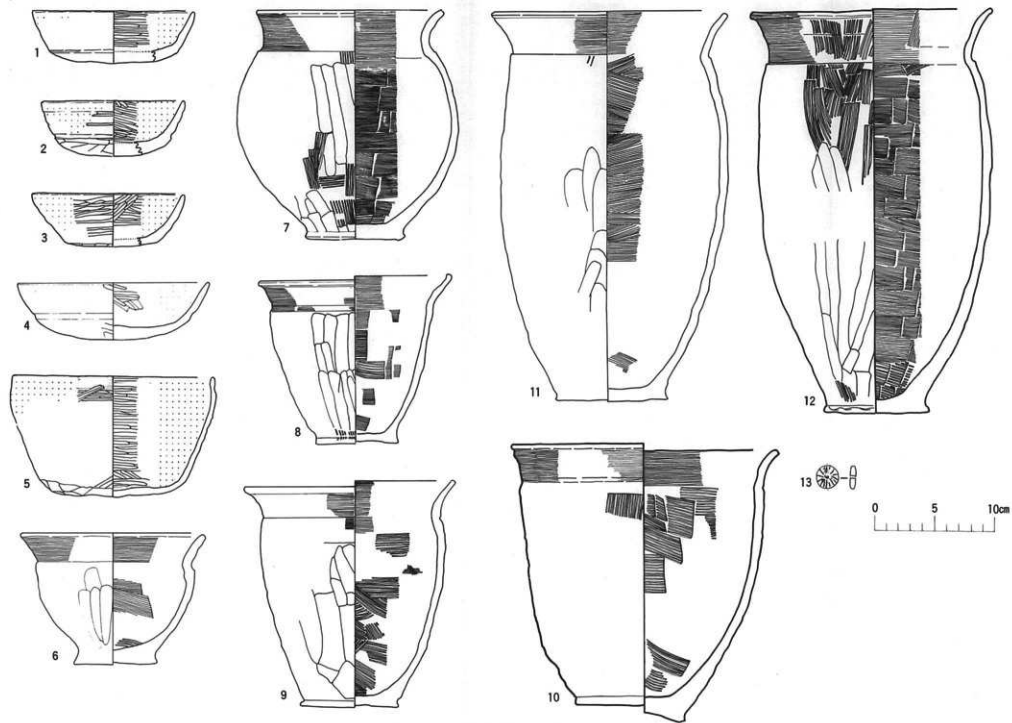
重複・大ピット1は土層断面図でも明らかのように住居跡の埋土に掘り込まれており、大ピット2は西・南壁のコーナーを破壊して構築されている。また、煙道部の先端に築かれたP₁、北壁のカマド右寄りにあるP₂等は何れも新規のものである。一方、P₂は堆積土8層のある部分であるが、少なくとも南壁寄りには1層を掘り込んだ形跡がみられない。

堆積土・壁際の崩土と1層が住居跡に関わる埋土であるが、削平・攪乱・重複等によって残りが悪い。最も良好な状態にあるのは東壁南側付近であり、崩土の様子も同様である。

壁・床面からの壁高は3～24cmとばらつきがある。住居跡外周辺の検出面のレベルによる高低差はあまりないことから、床面の起伏によって壁高差が生じたものである。東壁側が最も高く、北壁側が低い。特に北・西壁の隅は顕著である。

床面・残存床面は凹凸が目立ち、高低差が一定しない。全体としては東壁側が深くなっており、その分壁も高くなる。遺物は床面より若干上位の層から出土するものも多く、カマドと想定される部分を除くと焼土等の分布もみられない。ただ、北・東壁のコーナー近くには、若干の炭化物がほぼ床面近くにみられる。

柱穴・位置的にはP₃が該当するかもしれないが、これだけでは断定できない。他のピットについては、壁寄りに集中する例が多いが、性格は不明である。以下、ピット計測の一覧を記すが、極端に小型のものや浅いものについては省く。尚、新規ピットについても同様の取り扱い



第18—2圖 B153整穴住居跡出土遺物

をする。

第8表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P ₀ | P ₁ | P ₂ | P ₃ | P ₄ | P ₅ | P ₆ |
|------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 上幅・下幅(長)cm | 70×60・50×30 | 52×44・30×28 | 28×28・18×14 | 25×22・16×14 | 42×25・16×15 | 73×42・35×15 | 34×25・23×18 |
| 検出面からの深さcm | 25 | 48 | 13 | 20 | 13 | 7 | 43 |

周溝・不定形な周溝であるが部分的にみられる。西壁と南壁下の周溝は、本来的には繋がっていたものであろうが、大ピット3によって破壊されたと思われる、不明である。北壁と東壁下の場合是一部だけみられる。上幅は7cmから20cmまで、平均深は床面より5cm位である。

カマド・北壁中央部にみられる。すぐ左側に煙道状の張り出しがみられるが、調査時点ではカマド部と推察されるだけの根拠に欠け、北壁張り出しピットとして処理されている。4cm前後の浅い窪みとなっている程度のもので、北壁との境界付近では底面が検出面とほぼ同位に近く、壁外のピットとみて大過ないあり方を呈している。ただ、西北端部に僅かながら焼土と炭化物の存在が認められるため、カマドとしての可能性を否定するものではない。この周辺は前述の如くに削平が激しい所でもある。

一方、本来のカマドたる部分は、P₄と大ピット1によって壊される間に位置する。燃焼部と思われる焼土は、大ピット1によって壊されているが、残存部で1×0.9m位の広がりを持つ。図示した焼土部分は、土層断面図に於ける5層と11層の存在する位置であり、底面が煙道より上位にある。11層はその高まり部分上に堆積している。また、12層そのものも焼土粒・炭化物を若干ながら含む層であり、実際の焼土範囲は北壁寄りの一段下がる部分にまで拡大される。燃焼部そのものは、焼土のある全域にわたるものとは思われないが、正確な範囲は確認できない。また、上部構造に関わる側壁等についての詳細は不明であるが、焼土内に存在する礫は側壁に関わる何らかの役割を果たしていたことを窺わせる。煙道部はP₀によって一部破壊されている凹み部分から始まると思われる、残存部で1m程ある。先端部の煙出しと推察される所は、P₄によって完全に破壊されている。

出土遺物

環型土器・実測はすべてD類である。A類は寛切を呈す底部片が1点だけみられる。D類のうち4点は床面出土・覆土内より1点、計5点の出土。No.5は器高の深い大型のもの。外面の口縁部周辺は横ナデの後で軽い寛みがきを加えている。体部は直線的に起き上がり、口縁で内湾する。底部外面の寛削りの方向は特に一定しない。No.3は覆土中からの出土。無段・平底で外面底部を除く全面に寛みがきを加えられている。体部と底部の境界は明瞭な方である。No.1は反転復元による実測。外面の仕上げは磨滅のため判然としないが、体部は寛みがき、底部は寛削りによると思われる。段はあまりはっきりしないが、内面にくびれが残っている。No.2は

反転復元。沈線より下方はダイナミックな剝削りが観察され、口縁部には僅かながらも窺みがき痕がある。尚、底部には黒斑が残る。No.4は反転復元。体部の下位に沈線様の段が繞る。内面のくびれはあまり目立たない。

この他に、内黒を呈す台付坏の脚部片が床面より2点・覆土内より2点、計4点出土している。また、D類の破片もみられ、内外面ともみがき仕上げの例が多い。僅か一片ではあるが、寛切で再調整のみられないC類底部片もみられる。

甕型土器・7点の実測。何れも土師器で、大・中・小の器種の他に胴部が球体形を呈すものがある。床面出土のものだけであり、外面に剝削りを施し、内面に刷毛目または窺ナデで仕上げの例が多い。底部に木葉痕を残すのはNo.7・9・10・12の4点である。他は削りと思われる。須恵器は、甕の底部片が若干散見する程度である。

Bj65竪穴住居跡 第19図 写真図版11

平面形・規模・方位・東壁の一部が攪乱されているが、点線で示した範囲に収まるとと思われる。残存する3つのコーナーは角張らないが方形に近いプランを呈す。東西辺長6.6m、南北辺長6.8mの規模で、カマド方向の主軸はN-10°-Wとやや西側に振れる。

堆積土・東壁側は耕作に関わるとされる後世の攪乱によって著しく破壊されているが、点線で図示した部分の土層断面がそれにあたる。堆積土は16の暗褐色とその下部層に大別される。17-20の層は凹んだ部分に堆積しているが、20層は上層とほぼ同じ色調を呈しており、22層も同様である。16・20・22層は土質も似ており、粘性が弱くかたい土である。

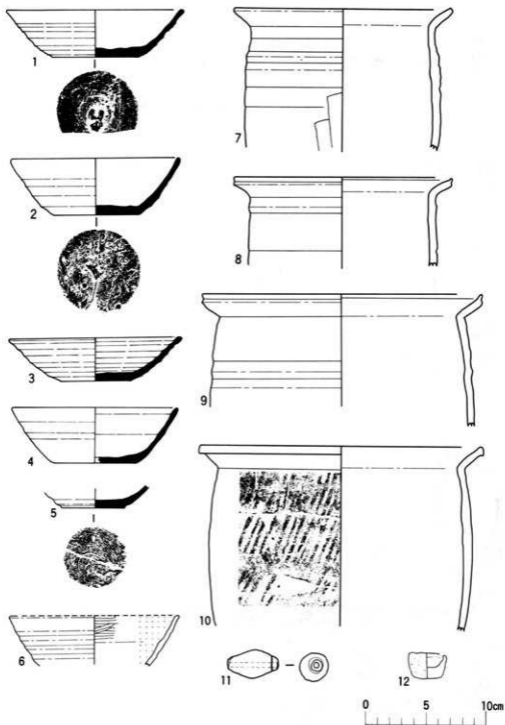
壁・各壁とも直線的ではなく、壁下にある周溝も変形している。東壁を除き床面より平均23cm前後の高さである。

床面・床面の状態については写真図版11を参照されたい。東側一帯は特に図示していないが、耕作時に於ける攪乱で無数の凹凸がある。西側は比較的平坦であるが、土層断面図左端にみられるようなへこみがある。この部分は周溝が切れる形にあるが、内側にどのような広がりを持つプランであるかは明らかにし得ない。また、床面上に於ける焼土はカマド周辺と東南隅付近にみられる。後者の直上には須恵器・土師器片・土錘等の遺物がみられる。

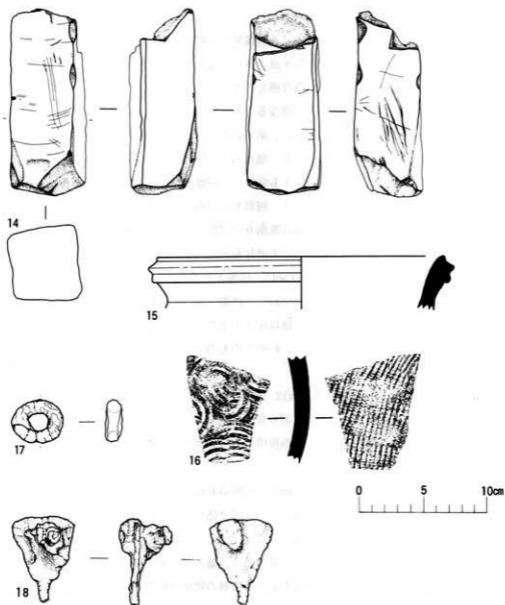
柱穴・住居跡内には6個のビットが確認された。P₃・P₄は浅く他のビットは深目である。P₃・P₆は、図上では小さくなっているが、攪乱による結果と思われる。P₁は半掘のプランであるが、中央最下部が柱あたりに相当するものでもあろう。配置や深さからみて、P₁・P₂・P₃・P₆が柱穴とも考えられるが、P₁の位置が若干南側に偏る。

周溝・周溝と断言できる程でもないが、北・西・南壁下に断続的にみられる。幅は一定しないが、深さは床面より8cm前後である。

カマド・北壁中央よりやや東側に位置する。燃焼部の凹みは125×90cmの範囲にあり、最深部



第19-2圖 Bj65竪穴住居跡出土遺物



第19-3図 B165竪穴住居跡出土遺物

は床面より14cmにも達する。また、焼土そのものは燃焼部に限らず、周辺の床面上にも広がっている。燃焼部に関わる側壁の痕跡は特にみられず、壁から直ぐに煙道が延びる。先端部の煙出し部は、ビット状の掘り込みもなく、煙道部の底面とほぼ同じレベルにある。全体としては燃焼部より一段高くなり、先端に行くに従って深くなる構造である。幅約25cm、長さ2.1m程の規模。

出土遺物

坏型土器・A類を主体とした出土をみせる。篋切のA類は遺存状態が良いが、糸切のものは芳しくない。図示した他には、篋切A類4点、糸切A類6点の底部片が出土している。但し、糸切を呈す破片には、白橙色を呈す軟質な感じのものが多く含まれる。これらはB類に近いあり方ともとれるが、色調のニュアンスが異なるためA類と分類している。篋切によるA類が、所謂くすべ色の硬質なものであるのに対し、糸切の場合は一点だけを除いて他は既述の如きものである。No.6は、床面出土のC類である。他にもこの種の破片は、覆土を中心に相当量出土している。内黒がとんだと思われる破片をも含めて、回転糸切を呈す坏が3点ある。

埴型土器・ロクロ成形によるものである。何れも赤褐色を呈す酸化焙焼成による。No.10は、特に体部を叩き目で仕上げている、下方は篋削りで調整する手法である。この種の例は他にも数例みられるが、叩き目後で削りがみられる破片もある。他の遺構からは、その性格が不明であるCb21遺構内にも散見する。須恵器はNo.15～16等がある。

その他・土鍾 (No.11) ・手捏ね土器 (No.12) ・鉄器 (No.13) ・砥石 (No.14) 等がある。手捏ね土器のみが覆土中からの出土であり、他は床面出土である。No.13の鉄器はリング状を呈すが馬具の一部でもあろうか。No.14の砥石は、砂岩質のもので4面が使用されている。研磨面は、ザラザラしていて光沢が少ない。

Cb21竪穴住居跡 第20図 写真図版12

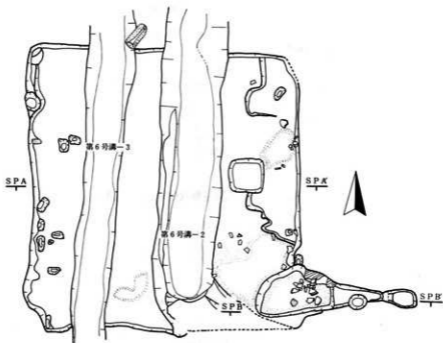
平面形・規模・方位・南・北壁が各々第6号溝-2・3によって切られるがほぼ方形に近い平面を呈す。北辺約4.3m・東辺4.5mの規模である。カマドを中心にする軸線はN-86°-Eとほぼ真東に近い。

重複・上面幅約0.5mの6号溝-3と同1.2m幅の6号溝-2との重複関係にある。両溝とも竪穴住居跡より新しく、住居跡が埋没してから切り込まれている。尚、6号溝-2は南辺付近で東折しており、6号溝-1に繋がる。

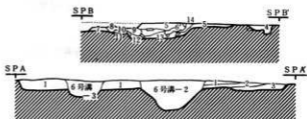
堆積土・6号溝-3をはさむ両側部分の堆積土は一層だけであるが、6号溝-2より東側部分にあっては浅い落ち込み部を埋め込んだ土に、2層の貼床面様の生活面が形成されたようである。

壁・地山を壁としており、高さ9cm前後である。西壁際にピットが集中するが、壁との関係は明らかではない。

床面・地山面までの掘り込みである。溝と重複しない部分に於いては西側の方が平坦である。6号溝-2と東壁にはさまれる東側部分にあっては、3～10cm前後の浅い落ち込みや、方形のピット等がみられる。土器は東辺に近い床面上に多くみられ、特にカマド部に集中する。焼土はカマド燃焼部を含め3箇所確認されている。6号溝-3と2の間に検出された焼土は、床



| 層 | 土色・特徴 |
|----|------------------------|
| 1 | 灰褐色シルト、黄色シルト面になる |
| 2 | 暗褐色シルト、灰化物、焼土が入る |
| 3 | 黄褐色シルトブロックと黒色シルトの混在 |
| 4 | 暗褐色シルト+黄褐色シルト、横に焼土がまじる |
| 5 | 赤褐色シルト+黄土 |
| 6 | 黄色シルト、やや砂質である |
| 7 | 暗褐色シルト+黄色シルト、焼土まじる |
| 8 | 暗褐色シルト、小ピット様の焼土 |
| 9 | 赤褐色土、焼土を含む、くずれやすい |
| 10 | 黄色シルト+黄土 |
| 11 | 暗褐色シルト+黄色シルト |
| 12 | 9にほぼ同 |
| 13 | 赤褐色焼土 |
| 14 | 13にほぼ同 |

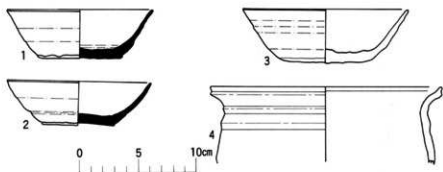


第20-1図 Cb21竪穴住居跡

面との間に厚さ3cm程の褐色シルト質土をはさみ形で存在していたものである。焼土の厚さは3cm程である。褐色シルトは一見して粘床の様相を呈している。また、周溝等の施設は発見されなかった。

柱穴・上幅50cm程度の方形を呈するピット1、その他長径が20～30cm程度の楕円形ピットが西辺に集中しているが、その位置・形状からみて柱穴と断定できるものはない。当然、柱あたりもなく、深さも5～10cm前後と浅い。

カマド・東南隅に位置している。燃焼部内の焼土は90×50cm程の範囲に広がり、壁外にも及ぶ。燃焼部側壁については、構築の痕跡がなく、焼土は床面より12cm前後の掘り込み内に堆積している。ただ、南側にあつては、燃焼部の焼土層がそのまま南壁の中位に厚さ10cm程度で密着していることから、壁そのものを側壁として利用していたものと思われる。煙道は燃焼部より70cm程延びており、底面より一段高くなってから緩やかな勾配をもって先端部上がる。



第20-2図 Cb21竪穴住居跡出土遺物

その先20cmの位置には上幅30cm径の煙出しがあるが、本来的には図の様に途切れるものではなく、検出面が低位のために煙出しの一部が削平されたものであろう。

出土遺物

坏型土器・各類の出土をみるが、C類については細片が多い。C類の中には回転糸切痕を残す底部片もある。またNo.3は、黒斑めいた部分のあることや、全体の色調が赤肌色があった感じからB類としたものである。磨滅のため切離しは不明であるが、寛切によるものかもしれない。

甕型土器・No.4の他に、同類の破片例が相当量みられる。体部の外面には大旨寛削りが施されている。

Cc53竪穴住居跡 第21図 第9表 写真図版11

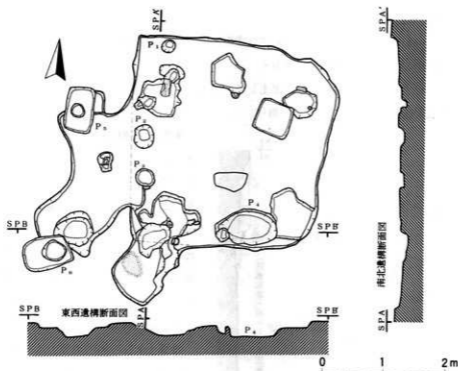
平面形・規模・方位・西壁・南壁が新規のビットによって破壊されているため、プランが著しく変形している。しかし、残存する壁のあり方からみて本来の形状はある程度推測できる。点線部がそれにあたる。東西辺長は約3.3m、南北辺長約3.5mの規模である。平面は東壁周辺が直線的でないが方形に近い。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線はN-4°-Eとほぼ磁北に近くになっている。

壁・壁高8~10cm程度。外傾する立ち上がりを呈す。

床面・新期の掘り込みや、不定形のビット等によって床面の残りが悪いが、掘り込みのない部分は大体レベルが揃う。

柱穴・端的にいて柱穴と断定されるビットはない。不定形の掘り込みは浅いものが多く、性格は不明である。ここではR₁-P₄についての一覧を記す。尚、P₆・P₆はCa03掘立遺構の掘り方である。

カマド・結論的には不明である。可能性としては西南隅の壁推定線外にある焼土が考えられるが、焼土の存在する底面がカマドに関わるものか、それとも新規の掘り込みのそれに当たる



第21-1図 Ce53竪穴住居跡

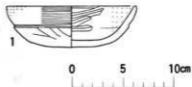
第9表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P ₁ | P ₂ | P ₃ | P ₄ |
|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 上幅・下幅径 (cm) | 23×23・13×10 | 38×32・18×17 | 31×28・23×20 | 95×55・70×39 |
| 検出面からの深さ (cm) | 不明 | 13 | 11 | 22 |

ものかはっきりしない。

出土遺物

環型土器・No.1は有段・丸底風のD類で埋土中からの出土である。石英粒・粗砂を多量に含む胎土。段の位置は体部の中央付近にあるが、横ナデと寛削りの境界でもあり、段部の横ナデは強調されている。その他に住居跡内に形成されたピット中から、外面に削りを持つ体部・底部片が若干出土している。また、回転糸切痕を残す底部片もピット内から出土しているが、この場合は酸化焙焼によるもので、B類の範疇ともとれる類の破片である。残存する体部の立ち上がりは緩く、皿型の器形に該当するものであろう。尚、ピット埋土内からはA類口縁部細片が1点だけみられるが、明確な共



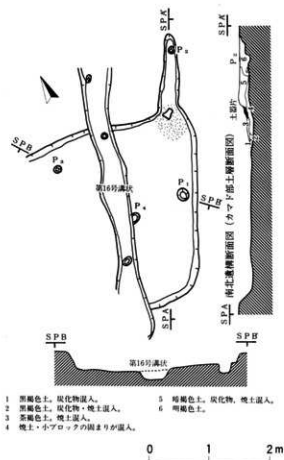
第21-2図 Ce53竪穴住居跡出土遺物

伴を示す程のものではない。

壘型土器・破片のみの出土である。ロクロ成形と断言できるものはない。肩部有段の頸部一体部片、外面に削りを有す底部片等がある。

その他・ピット内から縄文土器片が出土しているが、別項で記す。

Cf77竪穴住居跡 第22図 写真図版13



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 黒褐色土、炭化物混入。 | 5 暗褐色土、炭化物、焼土混入。 |
| 2 黒褐色土、炭化物・焼土混入。 | 6 暗褐色土。 |
| 3 赤褐色土、焼土混入。 | |
| 4 焼土・小アロウの固まりが混入。 | |

第22-1図 Cf77竪穴住居跡

わるものではなく、独立した形にある第16号溝状遺構関連とみて本項では除外する。また、P₂ P₃についても規模が小さく浅いため、同様の取扱いとす。残るP₄については、上幅径10×10cm、下幅7×6.5cm径、検出面(煙出し部底面)からの深さ10cm位の規模の小ピットであるが煙出し部より住居跡内に寄った形で存在する例は他にもみられる(旧期Dg09住居跡)。また、P₅は上幅20×17cm、下底幅12×9cm、検出面よりの深さ16cmの規模である。柱穴の可能性があるのであるがこのP₅であるが、断定するものではない。

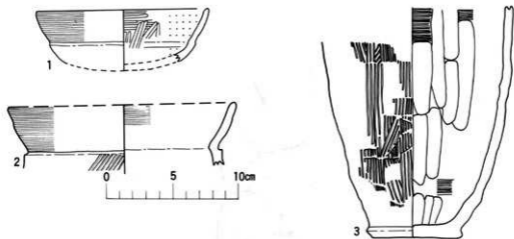
平面形・規模・方位・中央部を北東に走る第16号溝状遺構によって切られる。また西側は未掘となっており、プランの全容は不明である。北壁残存辺長は、カマド部と第16号溝状遺構の幅を加えて2.7m、東壁は3.1mとなる。南壁は第16号溝状遺構と東壁間60cm程の検出規模である。カマド方向を軸とする方位はN-29°-Eと東に寄る。

堆積土・住居跡内堆積土は不備のため不明である。ここではカマド部分の土層図と註記のみを記載している。

壁・残存壁高の最高値は北壁の25cm、最低値は東壁の17cmである。壁の立ち上がりは外傾するが垂直に近い部分が多い。

床面・0.5m四方間隔の測点に於けるレベル差は最高で2cm程度しかなく、水平に近い。また、凹凸も少ない。

柱穴・4個のピットがある。他に第16号溝状遺構内にも数個みられるが、レベルがかなり下位になるので、住居跡に関



第22-2図 Cf77竪穴住居跡出土遺物

カマド・北東コーナー部に位置する。燃焼部の焼土は約50cm径に広がる。この部分は床面より僅かに掘り窪められており、焼土上には土器片がのっている。燃焼部側壁の痕跡は特に観察されないが、東壁部の転用が考えられる。煙道部から煙出し先端までの長さは約1.3m、検出面からの深さは壁付近で17cm、先端部で10cmとなる。立ち上がりは、燃焼部底面より徐々に高くなっていく。

出土遺物

坏型土器・No.1は埋土中からの出土。体部に段を有し、内面にはくびれがある。底部は削りと思われるが、単位が確定しない。他に同類の破片が5点位あり、無段のものもみられる。

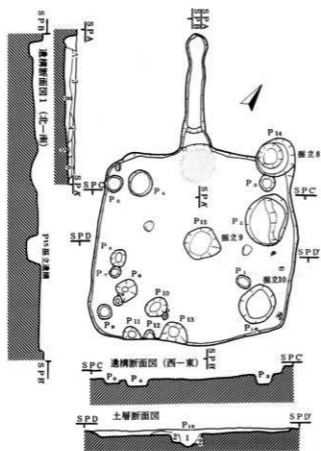
甕型土器・No.2とNo.3の2点の実測であるが、これらは同一個体と推察される。肩部段がかなり強調されているのが特徴である。この他に、埋土中から球胴を呈す体部片が出土している。外面には刷毛目の後に単位の細かい窠削りを加え、更に朱塗りの痕跡もみられる。内面は、横位のナデ仕上げである。

Cg06竪穴住居跡 第23図 第10表 写真図版14

平面形・規模・方位・Ce03掘立遺構により北東隅の壁が壊されている。東西辺長約3.3m、南北辺長約3.2mの隅丸方形を呈す。カマドを中心とする軸線はN-34°-Wとなっている。

重複・Ce03掘立遺構が新期である。R₄、P₁₅、P₁₆は掘立遺構の南西隅周辺の掘り方である。R₄の土質はCg06竪穴住居跡の堆積土と同質になっており、特に掘り込みの境界はみられない。

堆積土・単層である。2層はR₄の掘り込みに関わって形成されたものであろう。1層に混じる褐色シルトのブロックのあり方や、2層そのものとの関連からみてR₄にあっても本来的にはCg06竪穴住居跡の堆積土中への掘り込みがあったと考えられる。



| ■ 土 質 | 注 意 | 1 | 2 |
|----------|------------------------------|----------|------------------------|
| 1 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。一部は赤土。 | 3 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 2 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 4 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 3 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 5 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 4 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 6 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 5 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 7 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 6 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 8 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |
| 7 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層が混入し、やや硬い。 | 9 100%-% | 黄褐色土、粘り強く、腐植層・焼土多量に混入。 |

第23-1図 Cg06竪穴住居跡

これに対し、他のビット底面のレベルは R_8 と R_9 で最高22cmの比高差があり、ばらつきがみられる。位置的にみて、 P_4 ・ P_5 ・ P_6 の3基が柱穴と推定される。

カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部は煙道に接する屋内に60cm径の規模でみられたが、

第10表 住居跡内ビット計測値一覧表

(深さは検出面より・単位cm)

| | R_1 | R_2 | R_3 | R_4 | R_5 | R_6 | R_7 | R_8 | R_9 | P_{10} | P_{11} | P_{12} | P_{13} |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------|----------|----------|----------|
| 上 幅 径 | 25×20 | 80×70 | 26×25 | 42×38 | 29×29 | 27×22 | 18×17 | 33×33 | 25×24 | 37×29 | 28×21 | 22×18 | 45×30 |
| 下 幅 径 | 18×13 | 75×55 | 15×15 | 35×29 | 21×21 | 16×10 | 12×11 | 12×8 | 16×16 | 21×13 | 12×11 | 15×10 | 18×18 |
| 深 さ | 10 | 14 | 15 | 10 | 4 | 14 | 9 | 16 | 11 | 22 | 14 | 16 | 17 |

壁・地山を壁としており、平均高は検出面まで約7cm程である。東壁に比して西壁がやや低くなっている。立ち上がりは何れの壁も僅かに外傾している。

床面・床面上には新期の掘立遺構のビットを含めて多数のビットが掘り込まれ、残りは良くないが、残存床面部は平坦でレベル差も殆んどない。焼土は燃焼部を除いて他には確認されず、また、周溝の施設もみられない。

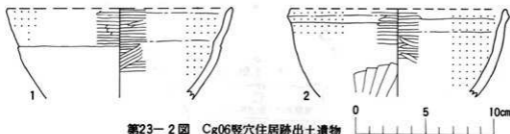
柱穴・住居跡内には16個のビットが確認されている。このうち R_4 ・ R_5 ・ R_9 の3基はCe03掘立遺構に関わるものであるため計測値一覧表から除外している。

掘立遺構の一部となる R_4 ・ R_5 ・ P_{10} は、底面のレベルがほぼ同位にあり検出面(住居跡床面)より20cm下部にある。

床面上に焼土が堆積している程度のものである。また、側壁も特に検出されず上部構造については不明である。煙道は北壁線上で僅かに高くなり煙出しに向かって緩やかに下降する。煙道の長さは約1.5 m、検出面より底面まで平均20cm前後の深さになる。先端部にはピット状に掘り込まれた煙出しがある。40cm径で深さ22cm程の規模である。底面には15×7 cm、厚さ5 cm程の礎が貼りついていた。

出土遺物

出土遺物は少ない。坏型土器No.1・2は反転復元によるが、器高の深い大き目なD類である。No.2は、口縁部の形態が他のD類と異なるが何れも窺みがき、黒色処理が外面体部上半にまで及ぶ。尚、重複するCe03掘立柱建物遺構からも大き目なものが出ており、出土地点でみる限りはCe03遺構の範囲にかかるものであるが、本来的にはCg06竪穴住居跡に関わる遺物と推測される。また、これらの坏に類似した大型の坏はBi53竪穴住居跡からも出土している。



第23-2図 Cg06竪穴住居跡出土遺物

Cg56竪穴住居跡 第24図 第11表 写真図版16

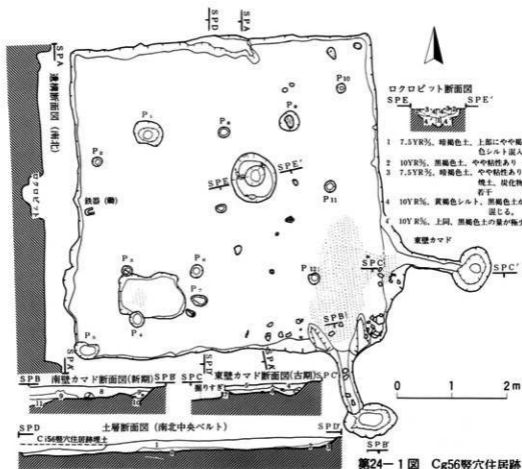
平面形・規模・方位・南東隅が若干丸くなり、また西辺の一部が直線的ではないがほぼ方形に近いといつてよい。東西辺長約5.6 m、南北辺長約5.75 mの規模である。カマドを中心とする軸線は、南カマドでN-172°-E、東カマドではN-98°-Eとなる。尚、南カマドの煙出し部分は電柱施設のため破壊されており、一部変形している。

重複・Ci56竪穴住居跡、Ch53掘立柱遺構と重複する。時期的にはCg56住居跡→Ci56住居跡→Ch53掘立柱遺構となり、Ch53掘立柱遺構東半部の掘り方がCg56竪穴住居跡床面に達していない。位置的には、Cg56住居跡の南西隅付近にCi56住居跡が築かれ、更にCh53掘立柱建物遺構東半部が重なる。

堆積土・東側に攪乱されている部分があり層位が一定しない所もあるが、ほぼ単一層である。住居内中央部と西・北側部分の下層部（土層断面図2層）に黒で汚れた薄い堆積層がみられる。この層の中に土器片・鉄器、焼土・炭化物等が含まれている。使用時に於ける痕跡と思われる。

壁・Ci56竪穴住居跡で切られた部分は7～8 cmの壁高となるが、他は18cm前後が平均値である。立ち上がりは、直角に近い外傾をみせる。

床面・南側から北側方向へ6 cm前後のレベル差をもって低くなる。緩やかな傾斜であるが、



- 東・南カマド、住居内土性
- 1 黒褐色土、粘性ややあり、砂質シルト炭化物含む
2 黒褐色土、1より黒味かかる。炭化物・焼土・土器片あり
3 褐色シルト、粘性あり、壁の崩壊土
4 10YR5、黒色土、粘性若干
5 10YR5、シルト質土、乾燥するとサラサラになる。
6 10YR5、5より褐色が顕明である。指爪つき、若干粘性あり
7 10YR5、焼き層、炭化物、土器片を含む
8 黒褐色土、砂質が多く混じる。須恵器片
9 黒褐色土、焼土+炭化物が中心
10 黒色土、埋込部である。土器破片あり
11 赤褐色焼土層

北東隅付近は更に3cm程下がる。床面の凹凸は少ない。2基のカマドの焚口からその周辺には焼土が広がり、土器・鉄器が床面付近にみられる。床面上に薄く堆積する黒褐色土は、特に住居跡内の中央部に多くみられる。

柱穴・ロクロビット、方形のビットを除いて大小13個のビットが確認されたが、極端に浅いものは除外した。

第11表 住居跡内ビット計測値一覧表

| | R ₁ | R ₂ | R ₃ | R ₄ | P | R ₆ | R ₇ | R ₈ | R ₉ | P ₁₀ | P ₁₁ | P ₁₂ |
|--------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 上 幅 径(cm) | 60×40 | 16×15 | 20×18 | 28×27 | 45×30 | 25×20 | 32×20 | 20×17 | 35×37 | 17×17 | 22×22 | 30×20 |
| 下 幅 径(cm) | 18×15 | 10×8 | 14×10 | 17×15 | 28×18 | -×13 | 25×12 | 15×13 | -×10 | 5×6 | 12×11 | 12×10 |
| 検出面からの深さ(cm) | 24 | 21 | 14 | 13 | 17 | 26 | 13 | 9.0 | 16 | 26 | 27 | 25 |

このうちP₀はピットの埋土上に25×14cm径の石がのっている。P₁・P₀・P₁₀・P₁₁・P₁₂の埋土は黒褐色を呈しており、性質も殆んど同じである。配置からみてP₁とP₀が柱穴の可能性もあるが、柱あたり等はみられず断定するものではない。また、P₁₀・P₁₁・P₁₂は掘り方が小さい割には深目のピットである。1.8 m前後の間隔でほぼ一直線上に並ぶが、どのような施設に関わるピットであるかは不明である。

カマド・東壁と南壁隔近くに各々1基ずつ構築されている。東壁にあるカマドは燃焼部側壁が壊されており、南壁部につくり替えが行われている。古期東側カマドは、一部掘り過ぎもあるため燃焼土部範囲は確定しないが、焼土の分布状態からみて50cm径前後と思われる。煙道部は推定で1.2 m位の長さであり、底面は検出面より14cm程である。レベル差を持たずに煙出し部まで延びている。煙出し部は80×55cm径の楕円状に掘り込まれており、最深部で24cmある。

新期南側カマドは、褐色シルトによって燃焼部側壁がつくられ、住居跡壁より50cm程内側に張り出している。燃焼部は間口が80cm位あり、中央部に凹みがある。煙道は壁外へ約1.2 m延びており、緩やかな傾斜で立ち上がる。煙出し部分は攪乱されているため東側に広がっている。最深部で29cmあり、古期のそれより深く掘り込まれている。

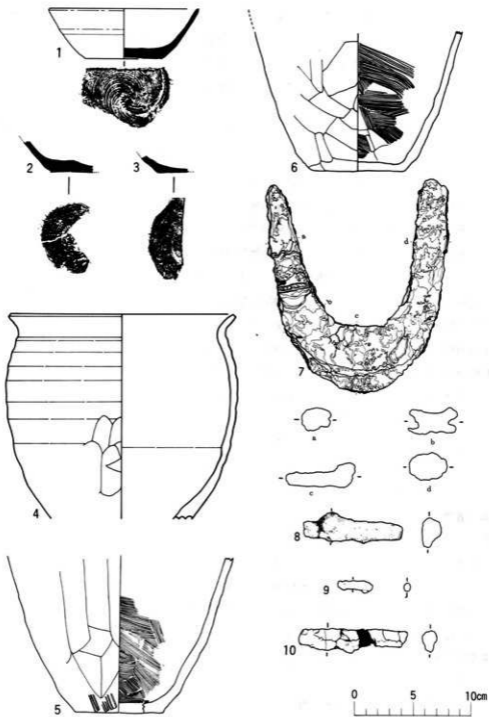
その他施設・ロクロピットが一基と西南隅近くに方形に近いピットがある。ロクロピットは上幅85cm径・最深部34cm程の規模で検出された。底面から1層をはさむようにして4・4'層のシルトが補強されている。この周辺の床面上には黒褐色土が薄く堆積しているが、粘土等は特にみられない。方形に近い形を呈するピットは、東側が膨らんでおり、底面までの深さも5～7cmと浅い。上幅は約1.2×0.9mの大きさであり、内部には焼土・木炭片・土器片等が入っている。尚、P₃・P₄・P₆・P₇はこのピットをはさむ形にある。貯蔵穴の可能性もあるが、本住居跡との関係は明らかでない。

出土遺物

全体として甕型土器が多く、坏は少ない。

坏型土器・No.1はA類である。胎土・焼成とも良質のもので、口縁部周辺に灰かぶりの跡がある。回転糸切無調整で、底径が比較的大きい。また、体部と底部の境界は明瞭である。No.2はA'類坏底部片。回転糸切無調整。白橙色を呈す軟質な焼成である。No.3は、A類坏の底部片である。寛切によるもので、胎土・焼成とも良質である。

甕型土器・No.4・5・6の3点の実測。No.4はロクロ成形によるものであるが、底部を欠失している。色調はNo.5・6より赤味が強く、赤褐色を呈す。最大径を胴部に有す器高の低い甕である。口唇部には、ロクロ成形の甕によくみられる凹みが繞る。また、体部中央より下位にかけて寛削りを施す。No.5・6の2点は、体部から底部にかけての実測であり、両者とも外面に寛削り、内面を寛ナデしており、底部外周は横位方向の寛削りで仕上げている。削りの単位



第24—2圖 Cg56豎穴住居跡出土遺物

はかなりダイナミックに施されており、色調は浅黄橙色を呈す。底径値は各々7.5cm前後。これらもロクロ成形によるものと思われる。

その他・No.7は、鉄製の鋤である。

Ch21竪穴住居跡 第25図 写真図版15

平面形・規模・方位・北西隅の一部が第6号溝-3によって壊されるが、方形を呈すプランと思われる。東西辺長2.9m南北辺長2.8mの規模。カマド方向の軸線はN-39°-Wと西側に寄る。

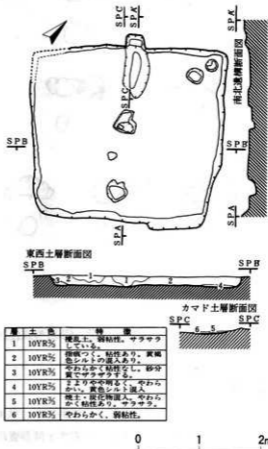
堆積土・攪乱部分は堆積土内だけに留まらず、床面下までピット状に掘り込まれる場合もある。第4層は床面の凹みを埋めるように堆積するが、第2層とはほぼ同じである。また、第2層中には黄褐色シルトの混入がみられるが、カマド燃焼部に近い部分にはシルトがブロック状に入っている。

壁・平均壁高は11cm位である。北壁側は検出面そのものが低位にあり、床面に於ける高低差が少ないため、壁高平均値の半分以下の残存高しかない部分もある。

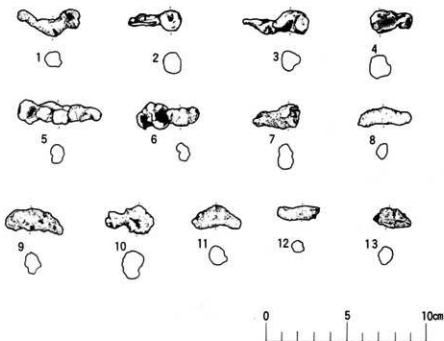
床面・新規のピットや攪乱によって床面が壊されている所もあるが、凹凸は目立たない。全体的にみて、北壁側が南壁側に比して2~3cm程高くなっている。

柱穴・住居跡内には4個のピットがある。調査担当者によれば、住居内のピットは新しいもので住居跡とは関係ないとの見解を述べているので、ここでも同様の解釈をとりたい。従って以下については特筆しない。

カマド・北壁中央部に位置する。燃焼部の側壁を有せず、壁際から外側にすぐ立ち上がる煙道である。即ち、煙道部が煙出し部そのものである。壁外へ25×35cm、検出面よりの深さ3cmの規模で方形を呈している。これは検出時に於ける上層削平の結果としての可能性もないわけではないが、定かではない。燃焼部の焼土は80×40cm径の楕円形に広がるが、煙出し部の底面にも焼土がみられる。燃焼部は底面まで3~4cmの厚さで焼土が堆積している。尚、この部分



第25-1図 Ch21竪穴住居跡



第25—2図 Ch21竪穴住居跡出土遺物実測図

は床面より焼土の厚さ分だけ掘り込まれている。

出土遺物

床面からは木葉痕を残す土師器の底部片が一点出土しているだけである。埋土中からはD類片3点、外面に篋削り・刷毛目痕を有す土師器燹片、鉄製品等がみられる。鉄製品は13点を数えるが、破損・錆化が激しく品名については不明である。

Ci 30竪穴住居跡 第26図 写真図版15

平面形・規模・第12号溝によって中央より西側部分を分断される。また西壁の一部は正確なプランが検出されなかった。北壁と東壁のコーナーは、はっきりとした角を持つが、他は丸くなっており、所謂隅丸形を呈す。推定部分も含めて、東・西壁と南・北壁の各々の中点を結ぶ長さは、それぞれ約4.2m、4.0mとなっている。

重複・土層断面図にある通り第12号溝が住居跡内の覆土を切り込み床面下にまで達しており、新旧関係は明らかである。

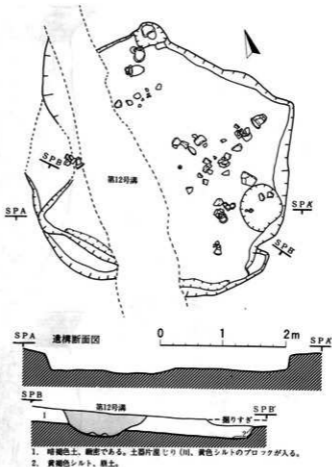
堆積土・西側の壁がはっきりせず断面図が途切れているが、暗褐色土と壁際の崩土層だけのようである。尚、第12号溝の埋土についてここでは特に触れない。

壁・壁高は残存する部分で平均23cm程であり、しかも垂直気味に立ち上がる。壁の平面は隅丸形で、各々の壁も直線的な部分は少ない。南壁の内側に幅13cm、深さ6cm前後の周溝の残痕

と思われる部分が検出されたが、本来の壁は既述のプランよりは小さくなるのであろう。

床面・黄色シルトのブロックが混じる暗褐色堆積土下部との境界にあたる床面は、砂質分の多い黄色シルトで構成されている。遺物の出土は比較的多く、床面上にあって土師器壺の完形品がみられる。

施設・柱穴・カマドは検出されなかった。貯蔵穴は東壁の凹みにも想定されるが、床面から2～3cm程度の深さしかない。また、周溝については既述の通りである。

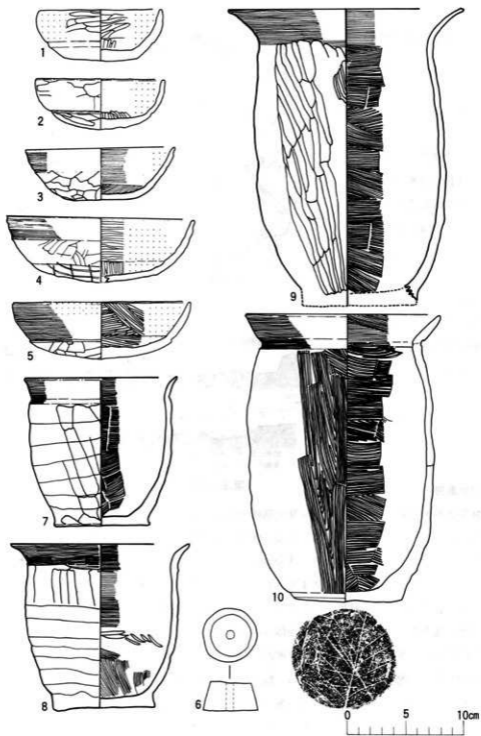


第26-1図 Ci30竪穴住居跡

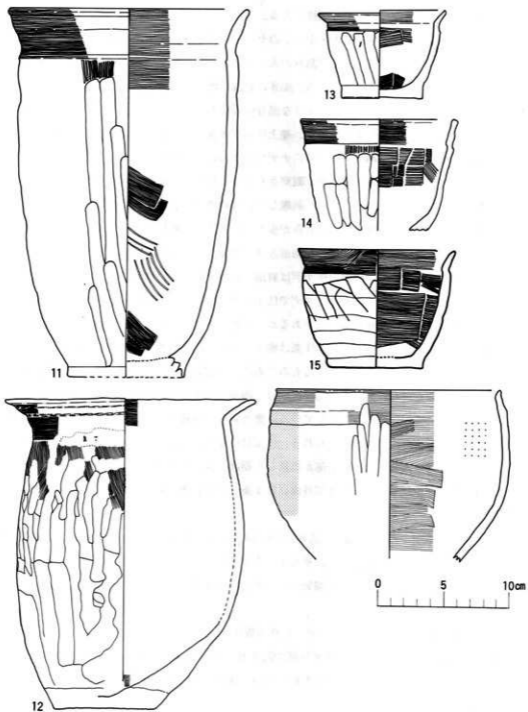
出土遺物

坏土器・D類5点の出土で、A類の明確な共伴はみられない。

No.1は小型の割には器肉が厚目である。体部の下位に軽い段があり、それに対応してくびれもみられる。No.2は段というより、沈線に近い作りである。丸底の底部は円周に沿った寛削りによって仕上げている。No.3はあまり目立たないが、軽い段が体部中央付近に繞っている。恐らく横ナデを入念にした結果として生じてきたものであろう。No.4は反転復元によるもので、き程度の残存である。軽い沈線状痕が体部中央よりやや上位に繞るが、この部分が横ナデと寛削り仕上げの境界ともなる。底部には寛削りの後に格子状の沈線文が刻まれている。No.5は明瞭な段を有し、内面にもくびれがある。段より上方は横ナデ、丸底を呈す底部には不定方向の寛削りが観察される。内面底部付近の寛みがきの方向が放射状ではなく、四角形の各辺の方向に走る。以上、5点について記したが、全体として石英細粒を多く含む胎土であり、黒変ないしは黒色処理のある部分以外の色調は肌色にも近い。尚、これらはすべて床面からの出土であ



第26—2 图 Ci30 整穴住居跡出土遺物



第26—3圖 C130豎穴住居跡出土遺物

り、以下に記す他の遺物についても同様である。

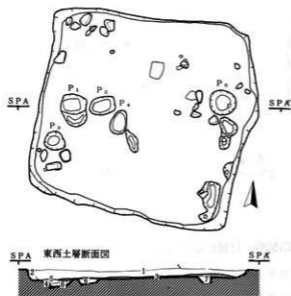
甕型土器・甕類は器種が豊富で大・中・小のセットをみせる。No.7は木葉底を呈す。巻上げ痕が露呈しており、それに沿ってひび割れが入っている。剥落しているのはその部分である。二次加熱のせいか多少赤味がかったり。No.8は肩部の明瞭な部分とそうでない部分とがある。横ナデの前の段階で工具で抉り出したような部分は段を形成しているが、そうでない所は無段となっている。この場合も木葉底を呈し、巻上げ痕が体部全面に露呈している。内面にある窺の調整痕は、巻上げ部分を補強するためにナデつけたものと思われる。No.9は肩部無段の長胴甕である。頸部を工具で調整した残痕が観察されるが、肩部を強調する程のものではない。単位の細かい削りが外面に施されている。剝離した底部の周辺は広範囲に黒色変化している。No.10も木葉底である。長胴で体部のふくらみが少ない。頸部は沈線様に一線を画しているが、肩部分ははっきりしない。また、底部の左側部分は、製作段階で体部に減り込んだ感じである。No.11は底部が剝落している。外面の横ナデは肩部から上位にあり、体部にあっては刷毛目の後に窺削りが加えられている。内面は窺ナデで仕上げたと思われるが不鮮明で判然としない部分が多い。No.12は、頸部に沈線様の区画があるが、肩部の段はみられない。胴部が歪んでおり、その分底部の位置がズレている。外面体部は刷毛目の後に窺削りを施している。No.13は最も小型のものであるが、成形は巻上げによるものである。底部には木葉痕が残っている。沈線様にもみえる明瞭な段が繞り、外面の体部は窺削り、内面はナデ仕上げである。胎土は悪く、色調は乳白色を呈す。No.14は底部が欠失している。甕というより鉢型に近いものであるが、口縁部を横ナデした際に生じた軽い段がみられる。体部には刷毛目後に窺削りを加え、内面は刷毛目だけによる仕上げである。No.15は底部が剝落した器高の低いものである。入念なナデによる窪みが肩部の段を明瞭にしている。体部外面には4条の巻上げ痕が観察される。内外面の大半が黒変している。

その他・紡錘車が1点。4.6cm径、高さ2.5cm大の土製品である。この他に、No.16の土師器がある。口唇から3cm位下まで横ナデ、それより下は窺削りによるとと思われる。また、外面には明瞭ではないが、朱塗りと思われる部分がみられる。球体を呈すこの種の土器は、本遺跡内では他例がない。

Cj56 竪穴住居跡 第27図 第12表 写真図版16

平面形・規模・方位・東辺の一部が外側に張り出しており、東西辺長約3.5m、南北辺長約3.2~3.5m程の規模である。ほぼ隅丸方形に近い。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線はN-5°-Eと僅かに東による。

重複・Ch53掘立遺構・Cg56竪穴住居跡と重複する。三者は時期的にCg56住→Ci56住→Ch53遺構の順である。Cg56竪穴住居跡南壁の一部に重なり、Ch53掘立遺構の掘り方が最後に掘



- 1 7.5YR% 粘性あり、堅くしまっている。クラップが入る。
- 2 7.5YR% 粘性あり、黄褐色シルト混入、さらさらしている。
- 3 7.5YR% やわらかく粘性あり、黄褐色シルトがアロックス状に入る。
- 4 10YR% 灰色土混入、さらさらしている。やわらかく粘性あり。
- 5 7.5YR% 粘性弱、やや堅い。
- 6 7.5YR% やわらかく粘性あり。
- 7 7.5YR% やわらかく、弱粘性。塊土混入、サラサラ。

第27-1図 Ci56竪穴住居跡

であろう。焼土・炭化物は北側半分の貼床に多くみられる。また西北と西南の隅には図示したように礫が固まってあった。

P_6 付近にも礫があるがこの場合は床面より上位に存している。

柱穴・ P_1 ~ P_6 までであるが、貼床をした時点ではこれらのピットは埋没或いは埋め込まれているので、本遺構との関わりは不明であり、位置的にみても柱穴と断言できる配列を示していない。尚、東南隅にある変形した掘り込みは後世のものであり、本遺構に伴うものではない。

第12表 住居跡内ピット計測値一覧表

| | P_1 | P_2 | P_3 | P_4 | P_6 |
|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 上幅・下幅径 (cm) | 45×33・30×20 | 43×30・31×20 | 35×30・19×16 | 40×25・30×20 | 44×42・26×26 |
| 検出面からの深さ (cm) | 14 | 11 | 8-9 | 9 | 11 |

出土遺物

土器類は破片だけの出土である。床面からはC類の体部片とNo.1の石製品、内面に掻き目痕を残す土師器片があるだけで、他は表土・埋土中からのものもある。後者については、ロクロ成形の土師器破片や木葉を呈す底部片、内黒台付環の脚部片、A類環片と鉄塊等が含まれる。

られる。

堆積土・貼床となる2層と覆土の1層である。1層は西側に厚く堆積しており、2層は住居内に広く分布している。

床面・Cg56竪穴住居跡と重なる部分が若干低くなっているが、シルトによる貼床を加えてレベルを揃えている。少なくとも P_1 ・ P_2 ・ P_3 が埋没した後に施されたものであるが、これらのピットそのものは、重複する2つの遺構のどちらかに関わる施設の一部であったかもしれない。また、 P_4 の場合は貼床と同じ土質のシルトで埋められている。貼床はCg56住居跡の堆積土中に掘り込まれた部分を補強すると同時に床面全体に広げたもの